

日本ライフセービング協会
コンペティション・ルールブック
JLA 競技規則 2025 年版
2026 年 07 月改訂
(2026.08.01 版, 2026.07.15 公開)

第 3 章
プール競技
POOL EVENTS



目次：第 3 章

第 3 章	プール競技 POOL EVENTS.....	1
1.	プール競技の一般規則 GENERAL CONDITIONS FOR POOL COMPETITION.....	1
2.	スタート THE STARTS.....	2
2.1	飛込スタート Dive start procedure	3
2.2	水中スタート In-water start procedure	3
2.3	失格 Disqualification	3
3.	マネキン MANIKINS.....	4
3.1	マネキンの浮上 Competitors surfacing the manikin.....	4
3.2	マネキンをキャリーする Carrying the manikin.....	5
3.3	マネキンをトウする (引っ張る) Towing the manikin.....	6
3.4	マネキンハンドラー Manikin handlers	7
4.	組み合わせ配置 SEEDING.....	8
4.1	予選における組み合わせ配置 Seeding in heats	8
4.2	タイム決勝の組み合わせ配置 Seeding in time-finals.....	8
4.3	レーンの割り当て Assignment of lanes.....	9
4.4	決勝における組み合わせ配置 Seeding in finals	9
5.	計時と順位の決定 TIMEKEEPING AND DETERMINATION OF PLACING.....	9
5.1	全自動審判計時装置による計時 Automatic officiating equipment.....	9
5.2	手動による計時 Manual time keeping and officiating.....	11
6.	テクニカルオフィシャル TECHNICAL OFFICIALS	11
7.	障害物スイム (200 m 及び 100 m) OBSTACLE SWIM (200 m and 100 m)	12
7.1	競技の説明 — 200 m Event description – 200 m	12
7.2	競技の説明 — 100 m Event description – 100 m	12
7.3	器材 Equipment.....	12
7.4	失格 Disqualification	12
8.	マネキンキャリー (50 m) MANIKIN CARRY (50 m)	14
8.1	競技の説明 Event description.....	14
8.2	器材 Equipment.....	14
8.3	失格 Disqualification	14
9.	レスキューメドレー (100 m) RESCUE MEDLEY (100 m).....	16
9.1	競技の説明 Event description.....	16
9.2	器材 Equipment.....	16
9.3	失格 Disqualification	17
10.	マネキンキャリー・ウィズフィン (100 m) MANIKIN CARRY WITH FINS (100 m)	18
10.1	競技の説明 Event description.....	18
10.2	器材 Equipment.....	18
10.3	失格 Disqualification	18

11. マネキントウ・ウィズフィン (100 m)	MANIKIN TOW WITH FINS (100 m)	20
11.1	競技の説明 Event description	20
11.2	器材 Equipment	20
11.3	失格 Disqualification	21
12. スーパーライフセーバー (200 m)	SUPER LIFESAVER (200 m)	23
12.1	競技の説明 Event description	23
12.2	器材 Equipment	23
12.3	失格 Disqualification	25
13. マネキンライフセーバーメドレー (100 m)	MANIKIN LIFESAVER MEDLEY (100 m)	27
13.1.	競技の説明 Event description	27
13.2.	器材 Equipment	27
13.3.	失格 Disqualification	29
14. ラインスロー 12.5 m	LINE THROW- 12.5 m	31
14.1	競技の説明 Event description	31
14.2	器材 Equipment	34
14.3	失格 Disqualification	34
15. マネキンリレー (4×25 m)	MANIKIN RELAY (4 x 25 m)	36
15.1	競技の説明 Event description	36
15.2	器材 Equipment	37
15.3	失格 Disqualification	37
16. 障害物リレー (4×50 m)	OBSTACLE RELAY (4 x 50 m)	39
16.1	競技の説明 Event description	39
16.2	器材 Equipment	39
16.3	失格 Disqualification	39
17. メドレーリレー (4×50 m)	MEDLEY RELAY (4 x 50 m)	41
17.1	競技の説明 Event description	41
17.2	器材 Equipment	42
17.3	失格 Disqualification	43
18. プールライフセーバーリレー (4×50 m)	POOL LIFESAVER RELAY (4 x 50 m)	44
18.1	競技の説明 Event description	44
18.2	器材 Equipment	45
18.3	失格 Disqualification	46
19. レスキュートウリレー (4×50 m)	RESCUE TOW RELAY (4 x 50 m)	47
19.1	競技の説明 Event description	47
19.2	器材 Equipment	48
19.3	失格 Disqualification	49
20. プール競技失格コード表	DISQUALIFICATION CODES FOR POOL EVENTS	51
参考文献	References	References-1
JLA 競技規則 編著者・協力者の履歴		Colophon-1

第 3 章 プール競技

POOL EVENTS

この章では、以下のプール競技について述べる：

- 障害物スイム - 200 m 及び 100 m,
- マネキンキャリー - 50 m,
- レスキューメドレー - 100 m,
- マネキンキャリー・ウィズフィン - 100 m ,
- マネキントウ・ウィズフィン - 100 m,
- スーパーライフセーバー - 200 m,
- マネキンライフセーバーメドレー - 100 m
- ラインスロー - 12.5 m,
- マネキンリレー - 4×25 m,
- 障害物リレー - 4×50 m,
- メドレーリレー - 4×50 m,
- プールライフセーバー混合リレー - 4×50 m,
- レスキュートウリレー - 4×50 m。

1. プール競技の一般規則 GENERAL CONDITIONS FOR POOL COMPETITION

チームマネージャー及び競技者は、競技スケジュール、競技規則及び競技の方法に精通している責任を有する。

- A. 競技者はマーシャリングエリア (Marshaling Area) への集合が遅れた場合、競技を始めることができない (DQ3)。
- B. 競技者又はチームが競技の開始時に不在だった場合、失格となる (DQ4)。
- C. 競技者とオフィシャルのみが指定された競技エリアのプールデッキに入ることが許される。競技者は競技していないとき、オフィシャルは職務についていないとき、指定された競技エリアを離れなければならない。
- D. 競技規則で特別に定められていない限り、人工的な推進手段は競技で使用することはできない (例えば、水かき、アームバンド)。
- E. プール種目において、粘着性、接着性のある物質 (液体状、個体状、又は噴霧するもの) を、競技者の手や足へ使用すること、又は掴みやすいようにマネキン又はレスキューチューブの表面への使用すること、又はプールの底を蹴りやすくするために使用すること、は認められない (DQ7)。
注意：競技者がフィンを装着しやすくするため、フィン及び/又は足にシャンプー又は石鹸、又は類似の生分解性潤滑剤の使用が認められる¹。
- F. 予防的、医療的、治療的又は運動学的な目的に用いられるボディテープは、それが競争的優位性を与えない限り、チーフレフリーの判断で認可される。

¹ 【JLA 注釈】日本国内のプール施設の利用規約に鑑み、JLA 主催競技会では、シャンプー/ (液体) 石鹸/その他潤滑剤の使用を制限する場合がある、

- 注意：**上記のことは、一般に、体（四肢を含むが手足は含まない）のテーピングが許容され得ることを意味する。また、一般的なテーピングは許可されない：複数の指（2 本以上の指を一緒にテープで固定）は、泳ぐときやマネキンを掴む助力になり得る：及び、指一本でも、マネキン/器材を掴んだりマネキンキャリアの助力になるようであれば許可されない。
- G. 競技者は、特に許可された競技種目（例えば、マネキンを伴った浮上、障害物スイム及びリレー、4×25 m マネキンリレー、マネキントウ、スーパーライフセーバー、マネキンライフセーバーメドレー、メドレーリレー、レスキュートウリレー）を除いて、プールの底を補助に利用してはならない（DQ8）。
- H. 競技者は、プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品）を補助として用いてはならない（DQ17, 24）。
- I. 競技中に他の競技者を妨害した競技者は失格となる（DQ2）。
- J. 競技種目別規則で特に指定されていない限り、競技者及び器材はレース中及びレースが終了した時点で、指定されたレーン内に留まっていなければならない：競技者はプールから出るよう指示されるまで水中に留まっておく（DQ9）。競技者は、プール端のタッチ板を越えてではなく、プールサイドから退水しなければならない。
- K. 全ての個人競技者及び同一チームの競技者は全ての種目において自チームの公式キャップを着用すること。オーシャン競技のキャップ²、又はゴム製、シリコン製キャップを着用しても良い。
- L. レースの開始後にキャップが脱げても³又は失っても、競技者が正しく競技を終了したとオフィシャルが確認できた場合、競技者は失格とならないこととする。
- M. ジャッジによるか又は全自動審判計時装置によるかを問わず、着順判定は抗議又は上訴の対象とならない。
- N. イベントディレクター、スターター、又はチーフレフリー（又はチーフレフリーが指定した者）によるスタートに関する決定は抗議又は上訴の対象とならない。
- O. チーフレフリーは、器材の不調又は干渉があった場合、レースの再走/再投げを許可する場合がある。再走/再投げのタイムが公式タイムとなる。
- P. 落としたフィンの回収：競技者は、マネキンの扱い方に違反していない限り（「3.3 マネキン」を参照）、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。

2. スタート THE STARTS

- A. 各レースのスタート前、イベントディレクター又は指定されたオフィシャルは以下を行う：

² 【JLA 注釈】 JLA 主催のプール競技において着用してよいオーシャン競技キャップは、そのデザインがプール用と同一である場合、もしくは全員がオーシャン競技キャップを着用する場合に限る。

³ 【JLA 注釈】 原文は the cap is displaced で一般に「キャップの位置がずれる」と翻訳するが、ここでは、キャップを脱いでいる状態（＝当初のあるべき位置にない）であっても失格にならない（＝ILS で確認済み）ので、「キャップが脱げて」と表記している。

- 全てのテクニカルオフィシャルが位置についていることを確認する,
 - 競技者, マネキンハンドラー, ヴィクティムらが適切な服装で正しい位置についていることを確認する,
 - 全ての器材が安全で正しい位置に配置されていることを確認する,
 - 短いホイッスルを 3 回鳴らして, 競技者に, (必要ならば, 及びまだ所定の位置に置いていない場合) 自分の機材を所定の位置に置き, 水着以外の全ての衣服を脱ぎ及び補助になるもの (aids) を外し, レースの準備をするよう伝える。
- B. 競技者及びテクニカルオフィシャルが規則通りにスタートする準備ができたなら, 指定されたオフィシャルは以下を行う:
- 各レースの公式開始を長いホイッスルで合図し, 競技者に, スターティングプラットフォームで位置につくように, 又はマネキンリレー競技の場合は水中に入るように指示する,
 - コースに向かって腕を伸ばしてスターターに (競技者がスターターの管理下にあることを) 合図する。
- C. 上記の手続きが行われたにもかかわらず, 競技者又はチームがレースのスタートにいなかった場合, 又は不適当な服装であった場合, オフィシャルは責任を負わない。即ち, 競技者/チーム/ハンドラーによる上記に関する抗議又は上訴は許されない。
- 注意 1:** チーフレフリーの判断で, 「オーバーザトップ (over the top)」方式スタートが用いられる場合がある。
- 注意 2:** ラインスローのスタート手順はラインスロー (S3-14) の「競技の説明」を参照せよ。

2.1 飛込スタート Dive start procedure

1 回制スタートを採用することとする。

- A. 長いホイッスルにより競技者はスターティングプラットフォームに上がり, そこに留まる。
- B. スターターの「Take your marks」の号令によって, 競技者はスターティングプラットフォーム前方に少なくとも一方の足の指を置き, 速やかにスタートの姿勢をとる。全ての競技者が静止したら, スターターは音によるスタートの合図を出す。
- C. 競技者は, スターティングプラットフォームから, 又はプールデッキから, 又は水中で一方の手をスタート壁/縁又はスターティングブロックに触れたまま, スタートしてもよい。

2.2 水中スタート In-water start procedure

1 回制スタートを採用することとする。

水中スタートで開始されるマネキンリレー及びラインスローでのスタート手順の詳細は, 各競技種目の説明を参照のこと。

2.3 失格 Disqualification

- A. スタートの合図をする前にスタートした (即ち, スタート動作を開始した) 全ての競技者は失格となる (DQ10) 。

競技者が動いたことが全て失格となるわけではない。スタートの合図を予想して明らかに前方へのスタート動作を起こした競技者が失格となる (DQ10)。

1 人あるいはそれ以上の競技者がスタート動作を起こしたか否かの判断は、イベントディレクター、スターター及びチーフレフリーの裁量による。一般に、ある競技者のスタート動作が他の競技者の不正スタートにつられて生じたと判断された場合は、不正スタートによる失格とはしない。

注意：スターティングブロックに電子 (圧力) システムが据え付けられている場合、スタート (及びリレーのチェンジオーバー) 違反の判定補助として使用され得る。

- B. 失格が宣告される前にスタートの合図が発せられていた場合、競技は続行し不正スタートした競技者は、競技終了後失格となる (DQ10)。
- C. スタートの合図の前に明らかに不正スタートをしたとみなされる場合は、スタートの合図をしないで、その競技者を失格とする：他の競技者は戻され再スタートをする (DQ10)。
- D. 競技者を呼び戻す合図は、スタートの合図と同じ合図を繰り返すと共に不正スタートロープ (false start rope) ⁴を落とし競技者を呼び戻す。又は、チーフレフリー又はチーフレフリーが指名した者が、スタートが不正であったと判断した場合、チーフレフリー又はチーフレフリーが指名した者はホイッスルを吹き、続いてスターターの合図を繰り返す。
- E. マネキンキャリア・ウィズフィン (100 m) の場合、呼び戻す合図は可能ならば水中音とする。もし呼び戻す合図として別の信号が用いられる場合、競技者には予め伝えておく。
- F. オフィシャルの間違いにより競技者が違反した場合、その違反は取り消される。

注意 1：イベントディレクター、チーフレフリー及びスターターの任務は、公正なスタートを保障することである。イベントディレクター、スターター又はチーフレフリーが、技術的・器材的な問題を含む何らかの理由でスタートが公正でないと判断した場合、競技者は呼び戻され再スタートが行われる。

注意 2：イベントディレクター、スターター、又はチーフレフリー (又はチーフレフリーが指名した者) によるスタートに関する判断は、抗議又は上訴の対象にはならない。

3. マネキン MANIKINS

3.1 マネキンの浮上 Competitors surfacing the manikin

- A. 競技者がマネキンと共に水面に浮上する際、競技者はプールの底を蹴ったり押したりしてもよい。
- B. 競技者は、
 - マネキンの頭頂部が、指定された 5 m ライン (マネキンキャリア、レスキューメドレー、スーパーライフセーバー) 又は 10 m ライン (マネキンキャリア・ウィズフィン

⁴ 【JLA 注釈】 ILS 原文及び World Aquatics (旧 FINA) 規則 (文献[3]) では false start rope (不正スタートロープ) と表記されている。日本水泳連盟では、2014 年版手引き (文献[4]) では「フライングロープ」 (「フライング」は和製英語)、2023 年版のプール公認規則 (文献[5]) では「不正出発防止用ロープ」との記載があるが、2024 年版プール公認規定 (文献[6]) では不正出発防止ロープを設置する「不正出発ロープ」の表記の記述があったが、2025 年版 (文献[7]) では「不正出発ポール」となっている。

ン) を越える前に, 少なくとも片手及び/又は腕でマネキン⁵を保持したまま水面上に出ねばならない,

注意: マネキンを保持したまま「水面上に出る(Break the surface)」とは, 競技者の頭が水面上に出ねばならないことを意味する⁶。

- マネキンの頭頂部が指定された 5/10 m ラインを越える時点で, マネキンを正しいキャリーポジション (carrying position) ⁶ にせねばならない,
- 指定された 5/10 m ラインを超えた後は, 水面に出た状態を維持し続けねばならない,
- 指定された 5/10 m ラインを超えた後, フィニッシュ壁/縁又は (該当する場合) ターニング (turning) 壁/縁にタッチするまで, 常にマネキンと接触し続けねばならない。

注意 1: 「水面」とは静水状態のプールの水平面を意味する。

注意 2: マネキンの判定基準 (manikin judging criteria) ⁷ は, マネキンの頭頂部が 5/10 m ラインを越える時のみ適用される。

3.2 マネキンをキャリーする Carrying the manikin

- A. マネキンがキャリーされる競技において, (ヴィクティムとしての) マネキンは, 呼吸停止だと想定する。水がマネキンの顔にかぶることは, ジャッジの基準ではない。
- B. 競技者は, 少なくとも一方の手 (及び/又は腕) でマネキンをキャリーせねばならず, 且つ, 常にマネキンに触れていなければならない。
- C. マネキンをキャリーするとき, 競技者の頭頂部はマネキンの頭頂部より前方にあらねばならない。
- D. 競技者は, マネキンの頭部をキャリーする方向に向けてマネキンをキャリーせねばならない, 即ち, マネキンは, 底部がキャリーする方向を向いてキャリーされてはならない。
- E. マネキンの喉 (首), 口, 鼻, 又は目を握る又は掴む, 又は, 腕をマネキンの喉 (首) にかける又は巻きつけてキャリーすることは許容される。また, マネキンの顔を競技者の体に押し当てることも許容される。
- F. マネキンの密閉プラグ (sealing plug) を掴んでは (摘まんでは) ならない。
- G. 競技者とマネキンは一体とみなし, キャリーの姿勢の時いずれかは水面より上にとどまっていなければならない。

注意 1: 「水面」とは静水状態のプールの水平面を意味する。

注意 2: キャリーの時, 競技者及びマネキンが共に完全に「水面下」であれば失格となる。

⁵ 【JLA 注釈】 競技者の頭を水面から出す (break the surface) 時にマネキンが保持されていれば良い。

⁶ 【JLA 注釈】 キャリーポジション (carrying position) とは, 「3.2 マネキンをキャリーする」で規定したマネキンの状態のことである。

⁷ 【JLA 注釈】 ここはマネキンの浮上についての項なので, この「マネキンの判定基準」とは, マネキンの浮上に関する判定基準のことである (5/10 m ラインまでに浮上したかどうかなど) 。

但し、マネキンが水中にあり、且つ、通常のストローク又はキックサイクルの一部として競技者が水面下に一瞬沈んだ (dip) としても、競技者の頭部又は腕などの体の一部がレース全体を通して水面上にあれば、失格とはならない⁸。

注意 3: ターニング又はフィニッシュ壁/縁にタッチするための最後のストローク/ランジ (一伸び) のため⁹、又はリレーのマネキン受け渡しのため、競技者及びマネキンが共に水面下になったとしても、壁/縁へのランジが 5 m ピックアップライン内であれば、失格とはならない。しかしながら、マネキンをキャリーしているとき、指定された 5 m ラインを越えた後、フィニッシュ壁/縁又は (該当する場合) ターニング壁/縁にタッチするまで、競技者は少なくとも片手及び/又は腕で、常にマネキンと接触し続けねばならない。

H. 「マネキンをキャリーする」規則は、マネキンの頭頂部が 5 m 又は 10 m ラインを越えた時点から適用される。

I. マネキンリレーの 5 m のスタートゾーン内及びチェンジオーバーゾーン内、及びライフセーバーリレーのチェンジオーバーゾーン内では、「マネキンをキャリーする」規則は適用されない。しかしながら競技者は少なくとも片手及び/又は腕で、マネキンの受け渡し時を含め常時マネキンと接触し続けねばならない。

注意: すべての競技と同様、マネキンリレー及びライフセーバーリレーのフィニッシュにおいて、リレーの最終競技者に (本節で定義される) 標準的な「マネキンをキャリーする」の規則が適用される。

3.3 マネキンをトウする (引っ張る) Towing the manikin

A. マネキンをトウする (引っ張る) 際、(ヴィクティムとしての) マネキンは、呼吸していると想定する。トウする前に、競技者は、10 m チェンジオーバーゾーン内において、マネキンを正しく確保せねばならない。「正しく確保」とは、レスキューチューブをマネキンの本体回り及び両腕の下又は両腕に接触して装着し、クリップをオーリング (O-ring) にかけることをいう。

注意 1: 本競技規則においてレスキューチューブとは、チューブのあらゆる部分及びマネキンの両腕の下又は両腕に接触して装着されオーリングにクリップ留めされるラインを含む。

注意 2: プールの水深が浅くて、10 m チェンジオーバーゾーン内でマネキン (又はレスキュートウリレーのヴィクティム) にチューブを装着する間競技者が立つ/歩くことができる場合、マネキン (又はヴィクティム) の頭頂部が 10 m ラインを通過していなければ失格ではない。競技者は、マネキンの頭部が 10 m ラインを通過した後は、立っては/歩いてはいけない。

⁸ 【JLA 注釈】JLA 主催競技会に於いてこの「レース全体を通して水面上にあれば」とは、レース中「一瞬たりとも水面下にあってはならぬ」ではなく、「通常ストローク又はキックサイクルの一部として瞬間的に水面下にあることを除いて、概ね水面上にあれば」を意図しているものとする。この箇所の文章が挿入された経緯は文献[8]に記載あり。

⁹ 【JLA 注釈】フィニッシュ前に競技者及びマネキンが共に水没しても良い最後のストローク/ランジとは、フィニッシュ壁/縁に近い場所で 1 回限り認められるもので、水没後にキックでフィニッシュ壁/縁まで推進してはならない。詳細は JLA 通達 第 2024-S006 号 (文献[9]) を参照のこと。

- B. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過していなければ、競技者は 10 m チェンジオーバーゾーン内に戻って、マネキンを確保し直してもよい。
- C. マネキンをトウする際、競技者は、仰向け、横向き、前向きで泳いでよく、またどんなキック又はストロークをしてもよい。
- D. 10 m チェンジオーバーゾーンを越えているとき、競技者はマネキンの顔が水面の上にあるようにレスキューチューブで正しく確保せねばならない。
- E. レスキューチューブとマネキンが離れた場合、競技者は失格となる。トウしている間、レスキューチューブがマネキンの一方の腕の下からずれても、10 m ラインで「正しく確保」されていて、マネキンの顔が水面より上にあれば失格にはならない。
- F. マネキンがレスキューチューブの中で回転しても、マネキンの顔が水面より上であれば、競技者は失格にならない。更に、マネキンが 10 m ラインにおいて正しく確保され顔が水面より上であれば、マネキンは頭を先にしてキャリアされる必要はない。
- G. マネキンが規定通り確保され、且つマネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者/チームにより意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）されていない限り、トウしている間、ライン/ロープは完全に伸ばす必要はない。

注意：レスキューチューブのラインを短くするためマネキンの首にラインを巻き付けた場合を除き、レスキューチューブのラインがマネキンに巻き付いた場合又はその他の理由で競技者によって短くなった場合でも、レース中であれば競技者は失格にならないこととする¹⁰。

3.4 マネキンハンドラー Manikin handlers

- A. マネキントウ・ウィズフィン、スーパーライフセーバー、及びマネキンライフセーバーメドレーでは、競技者のチームのメンバー1人がマネキンハンドラーとしてアシストする。登録されたチームコーチ、マネージャ又はチーム関係者がハンドラーを務めることが許可される。チーフレフリーが承認すれば、チームメンバー以外でもハンドラーを務めてもよい。
- B. マネキンハンドラーは、競技用キャップを着用する必要はない。
- C. 引継ぎの際、マネキンハンドラーは、少なくとも一方の手を使って、競技者がターニング縁/壁にタッチした時点で、マネキンを指定されたレーン内のいずれかの場所で直立させ、マネキンの顔をターニング壁に向くように保持する。その後、マネキンハンドラーは自身の判断で、いつマネキンの保持を解くか自由に決める、即ち、マネキンハンドラーはマネキンの保持をすぐに解いてもよい、そして、競技者がマネキンの周りにレスキューチューブを装着する際、マネキンハンドラーがマネキンを保持することも認められる。
- D. 自分の体の一部、保持しているマネキン、及び/又は引き起こした水の動きが、当該レー

¹⁰ 【JLA 注釈】この「競技者によって短くなった場合」とは、競技者の体のどこかに絡まるようなことが考えられる。この文面だけだと故意に短くすることも認められるが、故意か偶然かの判定が難しので現状では不問としている。但し、明らかに有利になるよう意図的に短くした場合などは、フェアプレー規範（S2-16.2）違反、不正行為（S2-17）とみなされる可能性がある。

スの他の競技者の妨げにならないようあらゆる努力をする。

- E. マネキンハンドラーは、競技中故意にプールに入ってはならない。
- F. レースについてのオフィシャルの指示全てに従うこと。

4. 組み合わせ配置 SEEDING

- A. 組み合わせ配置（シード）を行う。
- B. プール競技では、競技者は個人種目及びチーム種目のタイムを提出することが求められる。
- C. タイムが提出されていない競技者は、一番遅いタイムだとみなされる。
- D. 同タイムであった競技者らの順番は抽選で決定される。また、タイムを提出していない競技者ら（一番遅いタイムとして同タイムとみなされる）の順番も抽選で決定される。

4.1 予選における組み合わせ配置 Seeding in heats

（エントリー数に応じて）競技で予選と決勝が行われる場合、競技者は以下の方法により提出されたタイムに応じて組み合わせ配置される。

- A. 1 ヒートしかない場合：
そのヒートは決勝として組み合わせ配置され、最終セッションで泳ぐことになる。
- B. 2 ヒートある予選の場合：
最も早い競技者を第 2 ヒートに配置し、2 番目に早い競技者を第 1 ヒートに配置する。3 番目に早い競技者を第 2 ヒートに、4 番目に早い競技者を第 1 ヒートに、というように配置する。
- C. 3 ヒートある予選の場合：
最も早い競技者を第 3 ヒートに配置し、次に早い競技者を第 2 ヒートに配置し、その次に早い競技者を第 1 ヒートに配置する。4 番目に早い競技者を第 3 ヒートに、5 番目に早い競技者を第 2 ヒートに、6 番目に早い競技者を第 1 ヒートに、7 番目に早い競技者を第 3 ヒートに、というように配置する。
- D. 4 ヒート以上ある予選の場合：
最後の 3 ヒートは上記 C に従って組み合わせ配置する。最後の 3 ヒートの 1 つ前のヒート（最後から 4 ヒート目）は、2 番目に早い競技者群で構成される。最後の 4 ヒートの 1 つ前のヒート（最後から 5 ヒート目）は、3 番目に早い競技者群で構成される。以後同様。レーンは、下記の「3.4.3 レーンの割り当て」に記載の方法に従って、提出されたタイムの降順で割り当てられる。
- E. 例外：
1 つの競技で複数のヒートがある場合、各ヒートには最低 3 人の競技者を配置する。

4.2 タイム決勝の組み合わせ配置 Seeding in time-finals

競技がタイム決勝で行われる場合、競技者は提出されたタイムに応じて以下の方法により組み合わせ配置される。

- A. 1 ヒートしかない場合：
そのヒートは決勝として組み合わせ配置する。
- B. 2 ヒート以上の場合：

最も早い競技者群が最終ヒートに配置され、次節の詳細のとおりレーン割り当てされる。次に早い競技者群が最後から 2 番目のヒートに配置され、全ての競技者が提出タイムに応じてヒートに配置されレーン割り当てされるまで、同様に続く。

4.3 レーンの割り当て Assignment of lanes

8 レーンあるプールの第 4 レーンに最も早い競技者又はチームを配置する（レーンは、スタート側から見てプールの右側を第 1 レーンとする）。次に早いタイムの競技者又はチームをその 1 つ左のレーンに配置し、以下、右、左と交互に配置する。同タイムの競技者は抽選により、前述の方法に従ってレーンを割り当てられる。

4.4 決勝における組み合わせ配置 Seeding in finals

プール競技のスタート位置は以下のように組み合わせ配置される：

- A. 予選のタイムに基づき、上位 8 位までの競技者は A 決勝、9 位から 16 位までの競技者は B 決勝に割り当てされる。
- B. 予選の同じヒート又は異なるヒートにおいて、8 位又は 16 位を決める競技者のタイムが 1/100 秒精度で同じだった場合、どの競技者が A, B どちらの決勝に進むかを決定するためスイムオフを行う。そのスイムオフは関与する競技者の予選ヒート終了後 1 時間以内には行われない（ただし、関与する競技者がより短い時間で行うことに同意した場合を除く）。再度同タイムであれば、もう一回スイムオフが行われる。
- C. A 又は B 決勝において棄権した又はスタートしなかった（DNS）競技者又はチームは、チーム得点の点数を獲得しない（すなわち、「不参加」の加点は零点である）。
- D. 競技者が 1 人以上又はチームが 1 チーム以上 A 決勝を棄権した場合、B 決勝から競技者（又はチーム）が繰り上げられ、代替として最大 4 人（又は 4 チーム）までの競技者が予選ヒートから繰り上げられる。控えの競技者が足りなくても、招集できた競技者により B 決勝を行う。時間的に余裕があれば両決勝は予選タイムに基づき再シード（再度、組み合わせ配置）される。

注意：プール競技において、代替競技者は予選ヒートのタイムに基づき決定される。

5. 計時と順位の設定 TIMEKEEPING AND DETERMINATION OF PLACING

競技の順位及び記録を決定するために、計時は全自動審判計時装置¹¹又はデジタルストップウォッチのいずれかによって行われる。

5.1 全自動審判計時装置による計時 Automatic officiating equipment

- A. ILS 又は ILS 認定競技会において、全自動審判計時装置により記録されたタイムは、勝者及び全ての順位、さらに各レーンに適用されるタイムを決定することに使用される。結果は 1/100 秒まで記録されること。
- B. 最低限、全自動審判計時装置はスターターにより起動され、競技者のタイムをデジタル表示で提供せねばならない。
- C. 電子計時に加えて、1 レーンあたり最低 2 人のタイムキーパーが必要である。これらのタ

¹¹ 【JLA 注釈】 JLA 主催競技会における全自動審判計時装置とは、（財）日本水泳連盟の「自動審判装置等公認規則」に基づく装置を基本とする。

タイムキーパーはバックアップストップ (the buck-up stop) (ボタン及びプランジャー) 及び個別の (手動) ストップウォッチの両方を操作できる。

- D. 全自動審判計時装置によって判定された着順とタイムは、バックアップストップ (ボタン又はプランジャー) 及び (手動) ストップウォッチを含むジャッジ及びタイムキーパーの判定より優先される。
- E. 各レーンにストップウォッチが 2 つ又は 3 つあり、もし自動計時装置が故障した場合、フィニッシュ順位はタイムキーパーにより (バックアップストップボタン/プランジャー又は (手動) ストップウォッチを用いて) 記録されたタイムにより決定され、即ち、記録されたタイムがフィニッシュジャッジの順位判定よりも優先される。
- F. 各レーンにストップウォッチが 1 つしかなく、もし自動計時装置が故障した場合、フィニッシュジャッジによる判定されたフィニッシュ順位が、(バックアップストップボタン/プランジャー又は (手動) ストップウォッチの使用を含む) タイムキーパーにより記録されたタイムより優先される (下記参照)。
- G. もし自動計時装置が故障した場合、レースにおける 1 人又はそれ以上の競技者について、自動装置が故障したレーンの競技者に割り当てられるべき順位及びタイムを決定するため、以下の規定が適用される：
- タイムキーパーにより操作されたバックアップストップ (ボタン又はプランジャー) で決定されたタイムがジャッジによるフィニッシュ順位と一致する場合、これが公式の順位及びタイムとなる、
 - タイムキーパーにより操作されたバックアップストップ (ボタン又はプランジャー) で決定されたタイムが一致しない場合、割り当てられるべきタイムの決定には以下の規定が適用される (但し、自動計時装置が故障したレーンに限る) ：
 - 1 レーン当たりタイムキーパーが 3 人いて、2 人が同タイムの場合、そのタイムを公式とする。もしタイムキーパー 3 人のタイムが異なる場合、中間のタイムを公式とする。もし 1 台の時計が故障した場合、他 2 台のタイムの平均が公式タイム (及び順位) となる、
 - 1 レーン当たりタイムキーパーが 2 人いて、で同タイムの場合、そのタイムを公式とする。もし 2 人のタイムキーパー (のタイム) が異なるとき、2 つのタイムの平均を公式とする。もし 1 台の時計が故障した場合、残った 1 台のタイムが公式となる、
 - **注意：競技者の順位はタイムキーパーにより決定されるものとする、**
 - もしジャッジによるフィニッシュ順の決定が手動タイムキーパーにより記録されたタイムと一致しない場合、当該競技者に与えられるタイムは同一とすることとする (一例えば、もし 2 人の競技者がいて、自動機器で正しく記録されたタイムが無い場合、2 人の競技者に与えられるタイムは、記録された個々のタイムの和を当該競技者のストップウォッチの数で除したものとし、フィニッシュジャッジにより決定された先着者を勝者とする、
 - H. 設置されたいかなる機器も競技者のスタート及びターンを妨害してはならない。

5.2 手動による計時 Manual time keeping and officiating

- A. ILS 認定ライフセービング競技会で全自動審判計時装置が使用できない又は故障した場合、ILS 記録が認められるためには競技者/チームのタイムは 3 人のタイムキーパーにより記録されねばならない。別途 2 人のタイムキーパーが指定されており、そのどちらかは、競技中に時計がスタート又はストップしたタイムキーパー、又は何らかの理由でタイムを記録できなかったタイムキーパーと交代するよう指示される。
- B. 時計はスタート合図があった時に始動し、競技者/チームが競技者の身体 of のいずれかの部分で (タイムキーパーに明瞭に目視できるよう) フィニッシュ壁/縁にタッチしたときに停止する。
- C. レーン当たりストップウォッチが 2 つ又は 3 つあり、且つ全てがタイムを記録する場合、記録されたタイムにより決定される順位はフィニッシュジャッジの判定よりも優先される。
- D. レーン当たりストップウォッチが 1 つしかない場合、着順はフィニッシュジャッジの判定により決定される。
- 注意：主要な競技会 (例えば、ILS 世界選手権及び ILS 認定競技) では、高い場所からフィニッシュを記録するビデオジャッジの配置が推奨される。少なくとも (対角線で測って) 9 インチ/228 mm のタブレット型デバイス又はそれ以上の高解像度機器を使用すること。当該ビデオはフィニッシュジャッジが結果確認のため参照するものとする。
- E. 3 人のタイムキーパーのうち 2 人のタイムが同じであれば、そのタイムを公式とする。もし 3 人のタイムが異なる場合、中間 (2 番目) のタイムを公式とする。もし 1 台の時計が計時できなかった場合、残り 2 つのタイムの平均を競技者の公式タイムとする。
- F. 2 人のタイムキーパーが同じタイムを記録した場合、そのタイムを公式とする。2 人のタイムキーパーのタイムが異なる場合、2 つのタイムの平均を公式とする。もし一方の時計が故障した場合、残りのタイムが競技者の公式タイムとなる。
- G. ジャッジの着順判定が手動タイムキーパーの記録したタイムと一致しない場合、当該競技者に同一タイムを割り当てることとする。例えば、2 人の競技者が関係する場合、両競技者に割り当てるタイムは、記録された個々のタイムの和を当該競技者のストップウォッチの数で除したものと し、フィニッシュジャッジにより決定された先着者を勝者とする。

6. テクニカルオフィシャル TECHNICAL OFFICIALS

- A. テクニカルオフィシャルは、種目が公正に且つ ILS/JLA 規則及び手順の範囲内において運営されるように保障する。
- B. テクニカルオフィシャルはまた、競技者の動作が種目別競技規則を順守しているか否かを評価する。
- C. テクニカルオフィシャルは、自分が判定するレーンが明瞭に見えるように配置されなければならない。

7. 障害物スイム (200 m 及び 100 m) OBSTACLE SWIM (200 m and 100 m)

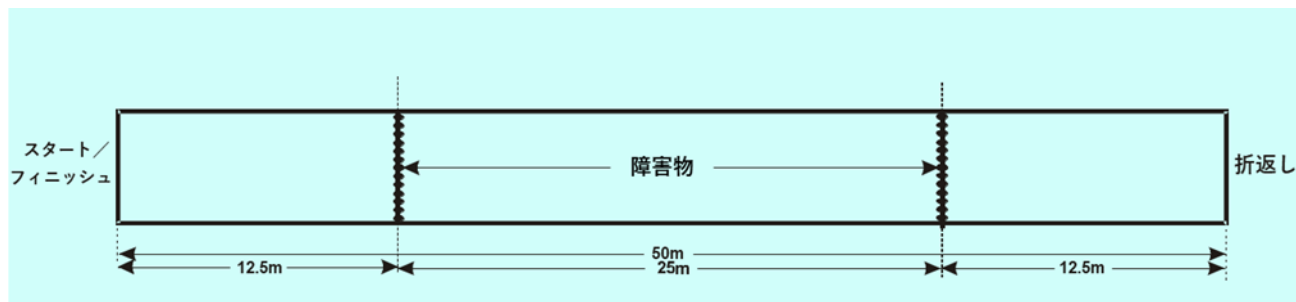


図 1：障害物スイム (200 m 及び 100 m)

7.1 競技の説明 — 200 m Event description – 200 m

競技者は音による合図で飛び込みスタートし、水中の障害物の下を 8 回通過しながら 200 m 泳いで、プールのフィニッシュ壁/縁にタッチする。

- A. 競技者は、飛び込んでから第 1 障害物までの間に；各障害物を通過した後；及びターンの後に障害物の下を通過する前に、水面上に出なければならない。

注意：「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水面から出なければならないことを意味する。

- B. 競技者は各障害物の下から水面に浮上する際、プールの底を蹴っても押してもよい。
C. 障害物に向かって泳ぐ、又は障害物にぶつかることは、失格となる行為ではない。

7.2 競技の説明 — 100 m Event description – 100 m

競技者は、音による合図で飛び込みスタートし、水中の障害物の下を 4 回通過しながら 100 m 泳いで、プールのフィニッシュ壁/縁にタッチする。

- A. 競技者は飛び込んだ後、競技者は第 1 障害物までの間に；各障害物を通過した後；及びターンの後に障害物の下を通過する前に、水面に浮上しなければならない。
B. 競技者は各障害物の下から水面に浮上する際、プールの底を蹴っても押してもよい。「水面に浮上する」とは競技者の頭が水面を突き破ることを意味する。
C. 障害物に向かって泳ぐ、又は障害物にぶつかることは、失格となる行為ではない。

7.3 器材 Equipment

障害物：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。

障害物は、全レーンにまたがってまっすぐな線を描くようにレーンロープと垂直に固定する。第 1 障害物は、スタートの壁から 12.5 m のところに設置し、第 2 障害物は逆の端から 12.5 m のところに設置する。2 つの障害物の距離は 25 m とする。

7.4 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 に記載された規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 障害物の上を通過してしまった後、ただちに障害物の上又は下を戻り、あらためて障害物の下を通過し直さなかった (DQ11) ,
B. 飛び込んだ後又はターンの後に、障害物の下を通過する前及び後に浮上しなかった (DQ12) ,
C. 浮上する際、プールの付属品 (レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品

- 等)を補助として用いた場合 — ただし、プールの底は含まれない (DQ17) ,
- D. ターンの際、壁/縁にタッチをしなかった (DQ13) ,
 - E. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった (DQ14) 。

8. マネキンキャリー (50 m) MANIKIN CARRY (50 m)

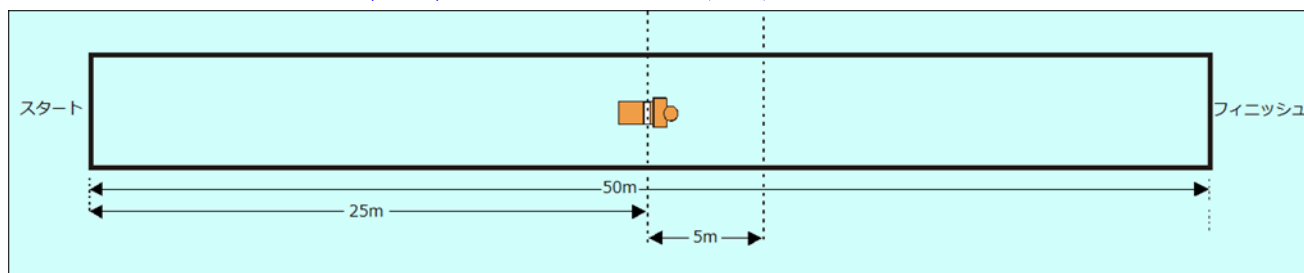


図 2：マネキンキャリー (50 m)

8.1 競技の説明 Event description

競技者は、音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 25 m 泳ぎ、それから潜って、沈んでいるマネキンを引き上げる。

- A. 競技者は、飛び込みスタートしてマネキンを回収する前までに、一旦水面上に出ねばならない。

注意：「水表面上に出る (Break the surface of the water)」とは、競技者の頭が水表面から出なければならないことを意味する。

- B. 競技者は、5 m のピックアップゾーン内でマネキンを浮上させ (surfaces the manikin) , 少なくとも片手及び/又は片腕を用いてそのマネキンをプールのフィニッシュ壁/縁までキャリーする。

注意：「マネキンと共に浮上する (Surfacing with the Manikin) ¹²」とは、マネキンの頭頂部が指定された 5 m ラインを超える前に、少なくとも片手又は片腕でマネキンを保持したまま、競技者の頭を水表面から出さねばならないことを意味する。

- C. マネキンを水面に引き上げる際、競技者はプールの底を押してもよい。
D. 競技者がプールのフィニッシュ壁/縁にタッチした時点で競技は完了する。

8.2 器材 Equipment

- A. マネキン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。
この競技に使うマネキンは水を一杯に入れ密閉する。競技者は主催者が用意したマネキンを
を用いなければならない。
- B. マネキンの配置：マネキンは 1.8 m から 3 m の間の深さに置く。3 m より深い場合、マネキンを台 (又はその他適切な補助物) の上に置き、既定の深さになるようにする。
- C. マネキンは、背を下にして、フィニッシュの方向に頭を向け、胸部中央ラインの上端が 25 m ライン上にくるように置かれる。
- D. マネキンの浮上：競技者は、マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションにせねばならない。

8.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 に記載された規則に加えて、以下の行為は失格になる：

¹² 【JLA 注釈】厳密には、直前の本文中の表現「surfaces the manikin」と注意の表現「surfacing with the manikin」が異なっているが、表現のバラツキの範囲内とみなす。

- A. マネキンに向かって潜る前に水面に浮上しなかった (DQ15) ,
- B. マネキンと一緒に水面に浮上する際, プールの付属品 (例えば, レーンロープ, 排水管, 水中ホッケー設備等) を補助に用いた - 但し, プールの底は含まれない (DQ17) ,
- C. マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに, マネキンを正しいキャリーポジションにしなかった (DQ18) ,
- D. 「S3-3 マネキン」の解説のように, 正しくないキャリー方法を用いた (DQ19) ,
- E. フィニッシュ壁/縁にタッチする前にマネキンを放した (DQ21) ,
- F. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった (DQ14) 。

9. レスキューメドレー (100 m) RESCUE MEDLEY (100 m)

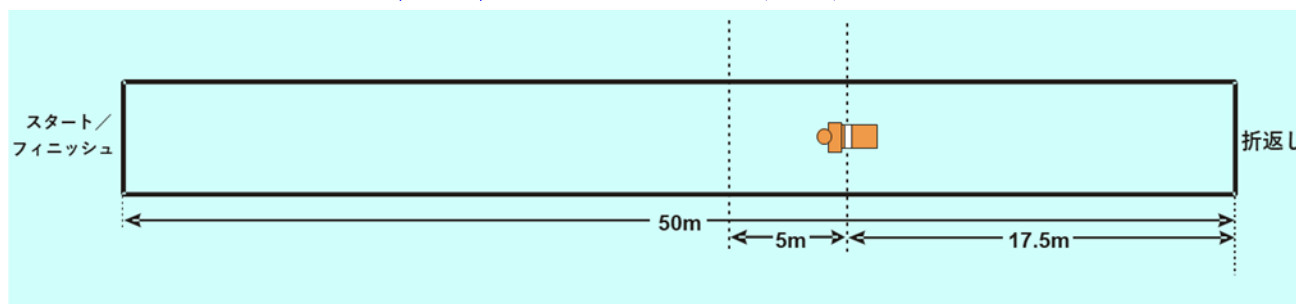


図 3：レスキューメドレー (100 m)

9.1 競技の説明 Event description

競技者は、音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 50 m 泳ぎ、ターンし、潜水して、ターニング壁から 17.5 m の位置に沈められたマネキンまで水面下を泳ぐ。

- A. 競技者は、飛び込みスタートして 50 m ターニング壁/縁にタッチする前に、及びターンしてマネキンを回収するため潜る前に、水面上に出ねばならない。

注意：「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水面から出なければならないことを意味する。

- B. 競技者は、5 m のピックアップラインまでの間にマネキンを浮上させ (surfaces the manikin)、その後フィニッシュ壁/縁にタッチするまでの残りの距離を、少なくとも片手及び/又は腕を用いてマネキンをキャリーする。

注意：「マネキンと共に浮上する (Surfacing with the Manikin¹³)」とは、マネキンの頭頂部が指定された 5 m ラインを超える前に、少なくとも片手又は片腕でマネキンを保持したまま、競技者の頭を水表面から出さねばならないことを意味する。

- C. 競技者は、ターンの前、ターンのその時、又はターンしている間、一呼吸又は複数回の呼吸をしてもよいが、マネキンに向かって水面下を泳ぐため足及び/又は手がターニング壁/縁を離れた後、マネキンと一緒に水面に浮上するまで、呼吸してはならない。

- D. 競技者は、マネキンと共に浮上する際、プールの底を押してもよいが、マネキンに向かって水面下を泳いでいる間は押してはいけない。

9.2 器材 Equipment

- A. マネキン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。マネキンは水を一杯に入れ密閉する。競技者は主催者が用意したマネキンを用いなければならない。

- B. マネキンの配置：

- マネキンは 1.8 m から 3 m の間の深さに置く。3 m より深い場合、マネキンを台（又はその他適切な補助物）の上に置き、既定の深さになるようにする。
- マネキンは、背を下にして、フィニッシュの方向に頭を向け、胸部中央ラインの上端が 17.5 m ライン上にくるように置かれる。

- C. マネキンの浮上：競技者は、マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに、マネキンを

¹³ 【JLA 注釈】厳密には、直前の本文中の表現「surfaces the manikin」と注意の表現「surfacing with the manikin」が異なっているが、表現のバラツキの範囲内とみなす。

正しいキャリーポジションにせねばならない。

9.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 に記載された規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 飛び込みスタートの後から 50 m ターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない競技者 (DQ16) ,
- B. ターンの後からマネキンを引き上げる前に浮上した (DQ22) ,
- C. マネキンと一緒に水面に浮上する際、プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケー設備等）を補助に用いた — 但し、プールの底は含まれない (DQ17) ,
- D. マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションにできなかった (DQ18) ,
- E. 「S3-3 マネキン」の解説のように、正しくないキャリー方法を用いた (DQ19) ,
- F. フィニッシュ壁/縁にタッチする前にマネキンを放した (DQ21) ,
- G. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった (DQ14) 。

10. マネキンキャリー・ウィズフィン (100 m) MANIKIN CARRY WITH FINS (100 m)

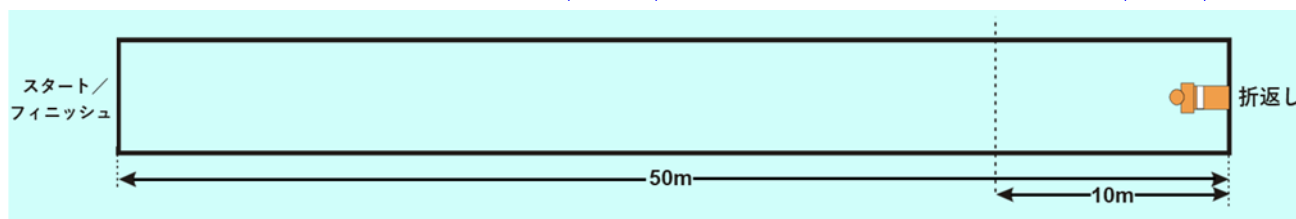


図 4：マネキンキャリー・ウィズフィン (100 m)

10.1 競技の説明 Event description

競技者は、フィンをつけ、音による合図で飛込みスタートし、自由形で 50 m 泳ぎ、それから、沈んでいるマネキンを回収する。競技者は 10 m ピックアップラインまでにマネキンを浮上させ、それからフィニッシュ壁/縁にタッチするまでの残りの距離を、少なくとも片手及び/又は腕を用いてマネキンをキャリーする。

- A. マネキンと共に浮上するとは、マネキンの頭頂部が指定された 10 m ラインを超える前に、少なくとも片手又は片腕でマネキンを保持したまま、競技者の頭を水表面から出さねばならないことを意味する。
- B. 競技者はマネキンに触れる前に浮上する必要はない。
- C. 競技者はプールのターニング壁/縁にタッチしなくてもよい。
- D. マネキンを浮上させる際、競技者はプールの底を押してもよい。

10.2 器材 Equipment

- A. マネキン、フィン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。マネキンは水を一杯に入れ密閉する。競技者は主催者が用意したマネキンを用具しなければならない。
- B. マネキンの配置：マネキンは 1.8 m から 3 m の間の深さに置く。3 m より深い場合、マネキンを台（又はその他適切な補助物）の上に置き、既定の深さになるようにする。
マネキンは、プールの底に接するように背を下にして、マネキンの底（脚側）がプール壁に接し、フィニッシュの方向に頭が向くように置かれる。
施設の設計上、プールの壁がプールの底と直角ではない場合、マネキンは壁にできるだけ近く、水面で測定した距離が壁から 300 mm 以内に位置しなければならない。
- C. マネキンの浮上：競技者は、マネキンの頭頂部が 10 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションにせねばならない。
- D. 落としたフィンの回収：競技者は、マネキンの扱い方に違反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。
競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。

10.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 に記載された規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. マネキンと一緒に水面に浮上する際、プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケー設備等）を補助に用いた — 但し、プールの底は含まれない (DQ17) ,
- B. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジション

- にしなかった (DQ23) ,
- C. 「S3-3 マネキン」の解説のように、正しくないキャリー方法を用いた (DQ19) ,
 - D. フィニッシュ壁/縁にタッチする前にマネキンを放した (DQ21) ,
 - E. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった (DQ14) 。

11. マネキントウ・ウィズフィン (100 m) MANIKIN TOW WITH FINS (100 m)

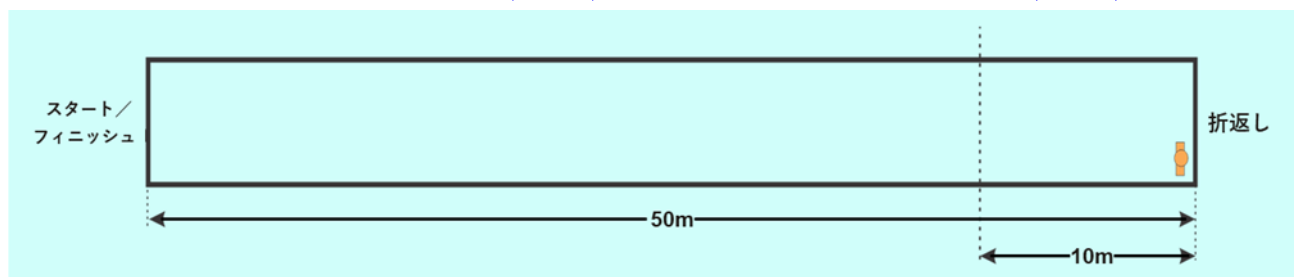


図 5：マネキントウ・ウィズフィン (100 m)

11.1 競技の説明 Event description

競技者は、フィンとレスキューチューブを装着し、音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 50 m 泳ぐ。ターニング壁/縁にタッチした後、10 m チェンジオーバーゾーンまでの間に、競技者はマネキンにチューブを正しく装着し、フィニッシュまでトウする。競技者がプールのフィニッシュ壁/縁にタッチしたとき競技は終了する。

A. 競技者は、ターニング壁/縁にタッチする前に浮上する必要はない。

11.2 器材 Equipment

- A. マネキン、フィン、レスキューチューブ：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。競技者は主催者が用意したマネキンとレスキューチューブを用いなければならない。マネキンは、浮いたとき胸部の横ラインの上部が水面にくるように水を入れ密閉される。
- B. マネキンの配置：引継ぎの際、マネキンハンドラーは、少なくとも一方の手を使って、競技者がターニング縁/壁にタッチした時点で、マネキンを指定されたレーン内のいずれかの場所で直立させ、マネキンの顔をターニング壁に向くように保持する。マネキンハンドラーは、競技中故意にプールに入ってはならない。
- C. スタート時のレスキューチューブ：スタートにおいて、レスキューチューブ本体と紐は、競技者に指定されたレーン内であれば、競技者の判断で自由に配置してよい。但し競技者は、レスキューチューブと紐が安全で正しく配置されるようにせねばならない。レスキューチューブ及びレスキューチューブのラインのクリップは、マネキンに装着するまで外したままにしておく。

注意：レスキューチューブ及びそのラインはスタート時に競技者の裁量で配置することができる（ライン/ロープを身体に巻き付ける、水着に挟むなどを含む）が、競技開始前にレスキューチューブトウ用のライン/ロープを意図的に短くする目的で結ぶ/結び目を作る、又はライン/ロープ自体にクリップ留めした場合、競技者は失格となる。

- D. レスキューチューブの装着：レスキューチューブは正しく装着せねばならない — 競技者の判断で — ランヤード/ハーネス (lanyard/harness) を片方又は両方の肩にかけるか、あるいは片方の肩から胸にかけるかとする。レスキューチューブを正しく着用していたのであれば、マネキンに接近する際、又はマネキンをトウしている間に、ランヤード/ハーネスが競技者の腕又はひじに落ちて、又は再びかけ直されても、失格の理由にはならない。

- E. マネキンの確保：**競技者は、ターニング壁/縁に初めてタッチしたあと、10 m チェンジオーバーゾーン内において、レスキューチューブをマネキンの両腕の下の胴体又は両腕に接触して巻き付け、オーリングにクリップ留めして、マネキンを正しく確保する。マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過していなければ、競技者は 10 m チェンジオーバーゾーン内に戻って、マネキンを確保し直してもよい。
- 注意 1：**ターニング壁/縁にタッチする前に意図せずマネキンに触れることは失格ではない。
- 注意 2：**マネキンの頭頂部が 10 m チェンジオーバーゾーン内に残っていれば、レスキューチューブをマネキンの周りにクリップする間、立つ又は歩くことは失格ではない。
- F. マネキンをトウする：**競技者は、「プール競技の一般規則」に詳述の通り、マネキンをトウせねば（引っ張らなければ）ならない。レスキューチューブは、マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過するまでに、マネキンに装着されねばならない。
- 注意 1：**レスキューチューブを用いたスタートについて—マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）された場合、競技者は失格となる。
- 注意 2：**レース実施中に、レスキューチューブのラインがマネキンに巻き付く又は競技者により短くされても、競技者は失格にならないこととする。
- G. レスキューチューブとマネキンが外れたら、**競技者は失格となる。10 m ラインにおいてレスキューチューブが「正しく付けられ」、マネキンの顔が水面より上にあれば、競技者がマネキンをトウしている間に一方の腕からレスキューチューブがずれても失格にはならない。
- H. マネキンがレスキューチューブ内で回転しても、**マネキンの顔が水面より上に残っている限り、競技者は失格にならない。マネキンが 10 m ライン時点で正しく確保され、且つ顔が水面より上に残っていれば、マネキンの頭を先にしてキャリーする必要はない。
- I. 落としたフィンの回収：**競技者は、マネキンの扱い方に違反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、失格とはならず、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。
- J. レスキューチューブの不具合：**レース中、レスキューチューブ、紐及び/又はハーネス（ベルト）に技術的な不具合があるとチーフレフリーが判断すれば、チーフレフリーはその競技者を別のヒートで再スタートさせてもよいが、それは、レスキューチューブが主催団体から提供され、全ての競技者は提供されたレスキューチューブを使わねばならない規則になっている場合に限る。

11.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 に記載された規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過する前、**プールの水深が浅くてマネキンにチューブを装着する間競技者が立つことができる場合を除いて、レスキューチューブをマネキンに巻きつける際、プールの付属品（レーンロープ、ステップ、水中ホッケーの備品等）を

- 補助として用いた場合 (DQ24) ,
- B. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に, レスキューチューブのクリップをリングにかけた場合 (DQ28) ,
 - C. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に, マネキンハンドラーがマネキンを放した場合 (DQ26) ,
 - D. マネキンハンドラーが競技中故意にプールに入った場合, プールに入り他の競技者の動きを妨害した場合, 又は競技の判定を妨害した場合 (DQ27) ,
 - E. 50 m 地点で競技者が意図的にマネキンに触れる前に, プールの壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ25) ,
 - F. レスキューチューブを正しくマネキンに巻き付けて確保しなかった場合 (即ち, マネキンの胴体及び両腕の下又は両腕に接触して巻いていない, 及びクリップをオーリングにかけていない) (DQ29) ,
 - G. マネキンの頭頂部で判定して 10 m チェンジオーバーゾーン内にあるうちに, マネキンにレスキューチューブを巻き付けて確保しなかった場合 (DQ30) ,
 - H. マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短くされた場合 (DQ32) ,
 - I. マネキンの顔が水面下にある状態でトウした場合 (DQ20) ,
 - J. マネキンをトウせずに押す又はキャリーした場合 (DQ31) ,
 - K. レスキューチューブがマネキンの周りに正しく装着された後, レスキューチューブとマネキンが離れた場合 (DQ33) ,
 - L. レスキューチューブとマネキンが所定の位置にない状態でフィニッシュ壁/縁をタッチした場合 (DQ34) ,
 - M. 競技者がフィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) 。

12. スーパーライフセーバー (200 m) SUPER LIFESAVER (200 m)

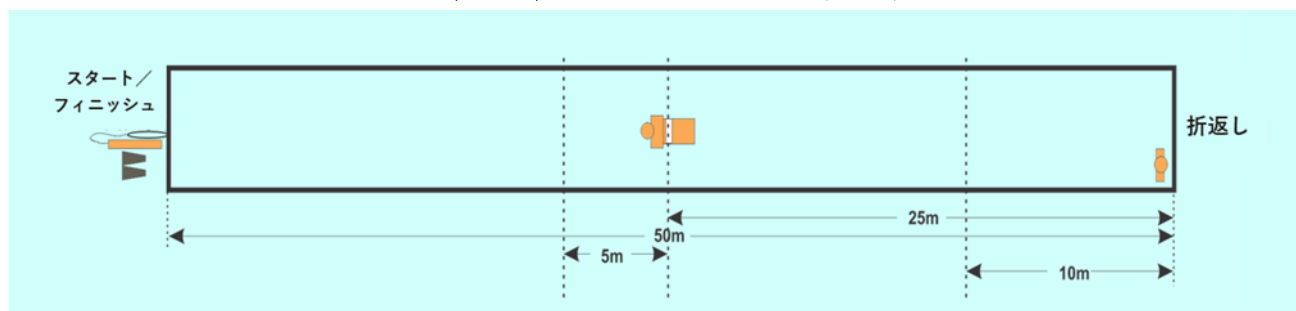


図 6：スーパーライフセーバー (200 m)

12.1 競技の説明 Event description

競技者は、音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 75 m 泳ぎ、沈められたマネキンを引き上げるため潜水する。

- A. 競技者は、飛び込みスタートして 50 m ターニング壁/縁にタッチする前に、水面上に出ねばならない。

注意：水泳中に「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水平面から出ねばならないことを意味する。

- B. 競技者は、5 m ピックアップラインまでにマネキンを浮上させ (surfaces the manikin)、それからターニング壁/縁にタッチするまでの残りの距離を、少なくとも片手及び/又は腕を用いてマネキンをキャリーする。壁/縁にタッチした後、競技者はマネキンを放す。

注意：「マネキンと共に浮上する (Surfacing with the Manikin¹⁵)」とは、マネキンの頭頂部が指定された 10 m ライン¹⁶を超える前に、少なくとも片手又は片腕でマネキンを保持したまま、競技者の頭を水表面から出さねばならないことを意味する。

- C. 水中で、競技者はフィン及びレスキューチューブを装着し、自由形で 50 m 泳ぐ。壁/縁にタッチした後の 10 m チェンジオーバーゾーンまでの間に、競技者はマネキンの周りにレスキューチューブを正しく付け、マネキンをフィニッシュまでトウする。

- D. 競技は、競技者がプールのフィニッシュ壁/縁にタッチして完了する。

12.2 器材 Equipment

- A. マネキン、フィン、レスキューチューブ：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。競技者は主催者が用意したマネキン及びレスキューチューブを用いなければならない。キャリーに用いる第 1 マネキンは水で完全に満たされ、密閉される。トウに用いる第 2 マネキンは、浮いたとき胸部の横ラインの上部が水面に来るように水が入れられ密閉される。

- B. フィンとレスキューチューブの置き方：スタートの前に、競技者はフィンとレスキューチ

¹⁵ 【JLA 注釈】厳密には、直前の本文中の表現「surfaces the manikin」と注意の表現「surfacing with the manikin」が異なっているが、表現のバラツキの範囲内とみなす。

¹⁶ 【JLA 注釈】英語版に「10 m line」とあるのでそのまま 10 m と記したが、競技の流れからするとここは「5 m ライン」であり、JLA 主催競技では「5 m ライン」ルールを採用する。この後のフィンを装着してからの動作（マネキンへのレスキューチューブ装着）との距離と混同したものと思われる。

ューブを指定されたレーン内のプールデッキ上 — スターティングブロック/台 (podium) ではない — に置かねばならない。レスキューチューブのクリップは、マネキンに装着するまで外したままにしておく。

注意：レスキューチューブ及びそのラインは競技者の裁量で配置することができるが、競技開始前にレスキューチューブトウ用のライン/ロープを意図的に短くする目的で結ぶ/結び目を作る、又はライン/ロープ自体にクリップ留めした場合、競技者は失格となる。

- C. **キャリーするマネキンの置き方：**マネキンは 1.8 m から 3 m の間の深さに置く。3 m より深い場合、マネキンをプラットフォーム (又はその他の台) の上に置き、既定の深さになるようにする。

マネキンは、プールの底に接するように背を下にして、フィニッシュの方向に頭が向くように置かれ、横ラインの上部が 25 m ラインにくるようにする。

- D. **第 1 マネキンの浮上：**競技者は、マネキンと共に浮上する際、プールの底を押してもよい。

競技者は、マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越える前に、マネキンを正しいキャリーポジションにせねばならない。

- E. **チューブとフィンの装着：**競技者は、ターニング壁/縁に初めてタッチした後、第 1 マネキンを手放す。競技者は、水中でフィンとレスキューチューブを装着し、自由形で 50 m 泳ぐ。

注意：レスキューチューブ及び/又はフィンを装着する間、ターニング壁/縁に接触し続けてもよい。

- F. **レスキューチューブの装着：**レスキューチューブは正しく装着せねばならない — 競技者の判断で — ランヤード/ハーネス (lanyard/harness) を片方又は両方の肩にかけるか、あるいは片方の肩から胸にかけるかする。

注意：レスキューチューブを正しく着用していたのであれば、競技者がマネキンに接近する際、又はマネキンをトウしている間に、ランヤード/ハーネスが競技者の腕又はひじに落ちて、又は再びかけ直されても、失格の理由にはならない。

- G. **マネキンの配置：**引渡しの際、マネキンハンドラーは、少なくとも一方の手を使って、競技者がターニング縁/壁にタッチした時点で、マネキンを指定されたレーン内のいずれかの場所で直立させ、マネキンの顔をターニング壁に向くように保持していること。マネキンハンドラーは競技中故意にプールに入ってはならない。

- H. **マネキンの確保：**競技者は、ターニング壁/縁に初めてタッチしたあと、10 m チェンジオーバーゾーン内において、レスキューチューブをマネキンの両腕の下又は両腕に接触して胴体に巻き付け、オーリングにクリップ留めして、マネキンを正しく確保せねばならない。マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過していなければ、競技者は 10 m チェンジオーバーゾーン内に戻って、マネキンを確保し直してもよい。

注意 1：ターニング壁/縁にタッチする前に意図せずマネキンに触れることは失格ではない。

注意 2：マネキンの頭頂部が 10 m チェンジオーバーゾーン内に残っていれば、レスキューチューブをマネキンの周りにクリップする間、立つ又は歩くことは失格ではない。

- I. マネキンをトウする：競技者は、「プール競技の一般規則」に詳述の通り、マネキンをトウせねば（引っ張らなければ）ならない。レスキューチューブは、マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過するまでに、マネキンに装着されねばならない。
- 注意 1：レスキューチューブを用いたスタートについて－マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）された場合、競技者は失格となる。
- 注意 2：レース実施中に、レスキューチューブのラインがマネキンに巻き付く又は競技者により短くされても、競技者は失格にならないこととする。
- J. レスキューチューブとマネキンが外れたら、競技者は失格となる。10 m ラインにおいてレスキューチューブが「正しく装着され」、マネキンの顔が水面より上にあれば、競技者がマネキンをトウしている間にレスキューチューブがずれても失格にはならない。
- K. マネキンがレスキューチューブ内で回転しても、マネキンの顔が水面より上に残っている限り、競技者は失格にならない。マネキンが 10 m ライン時点で正しく確保され、且つマネキンの顔が水面より上に残っていれば、マネキンの頭を先にしてキャリーする¹⁷必要はない。
- L. 落としたフィンの回収：競技者は、マネキンの扱い方に関する規則に違反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、失格とはならず、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。
- M. レスキューチューブの不具合：レース中、レスキューチューブ、紐及び/又はハーネス（ベルト）に技術的な不具合があるとチーフレフリーが判断すれば、チーフレフリーはその競技者を別のヒートで再スタートさせてもよいが、それは、レスキューチューブが主催団体から提供され、全ての競技者は提供されたレスキューチューブを使わねばならない規則になっている場合に限る。

12.3 失格 Disqualification

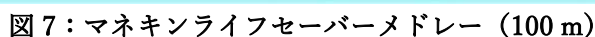
「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 飛び込みスタートの後から 50 m ターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない競技者 (DQ16) ,
- B. プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品）を補助として用いた場合－ただし、マネキンを浮上させる際のプールの底は含まれない (DQ17) ,
- C. マネキンの頭頂部が 5 m ピックアップゾーンを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションにしなかった場合 (DQ18) ,
- D. 「S3-3 マネキン」の解説のように、正しくないキャリー方法を用いた (DQ19) ,
- E. ターニング壁/縁にタッチする前にマネキンを放した (DQ21) ,

¹⁷ 【JLA 注釈】英語版では「...to be carried ...（キャリーされる）」とあるが、ここは「マネキンの頭を先にしてトウされる必要はない」が正しい。

- F. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過する前で、プールの水深が浅くてマネキンにチューブを装着する間競技者が立つことができる場合を除いて、レスキューチューブをマネキンに巻きつける際、プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、水中ホッケーの備品）を補助として用いた場合（DQ24）,
- G. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、レスキューチューブのクリップをリングにかけた場合（DQ28）,
- H. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、マネキンハンドラーがマネキンを放した場合（DQ26）,
- I. マネキンハンドラーが競技中故意にプールに入った場合、プールに入り他の競技者のパフォーマンスを妨害した場合、又は競技の判定を妨害した場合（DQ27）,
- J. 150 m 地点で競技者が意図的に第 2 マネキンに触れる前に、プールの壁/縁にタッチしなかった場合（DQ25）,
- K. レスキューチューブを正しくマネキンに巻き付けて確保しなかった場合（即ち、マネキンの胴体及び両腕の下又は両腕に接触して巻いていない、及びクリップをオーリングにかけていない）（DQ29）,
- L¹⁸. マネキンの頭頂部で判定して 10 m チェンジオーバーゾーン内にあるうちに、マネキンにレスキューチューブを巻き付けて確保しなかった場合（DQ30）,
- M. マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短くされた場合（DQ32）,
- N. マネキンの顔が水面下にある状態でトウした場合（DQ20）,
- O. マネキンをトウせずに押す又はキャリーした場合（DQ31）,
- P. レスキューチューブがマネキンの周りに正しく装着された後、レスキューチューブとマネキンが離れた場合（DQ33）,
- Q. レスキューチューブとマネキンが所定の位置にない状態でフィニッシュ壁/縁にタッチした場合（DQ34）,
- R. 競技者がフィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合（DQ14）。

¹⁸ 【JLA 注釈】原語版ではこのえが K 項と誤植され、以降のアルファベットもずれている。



競技者は音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 25 m 泳ぎ、沈められたマネキンを引き上げるため潜水する。

- A. 競技者は飛込みスタート後、マネキンを引き上げるため潜水する前に、水面上へ出ねばならない。
- B. 水泳中に「水面上に出る（Break the surface）」とは、競技者の頭が水平面から出ねばならないことを意味する。
- C. 競技者は、第1 マネキンを引き上げるため潜水し、マネキンを5 m のピックアップゾーン内において浮上させ、プールのターニング壁/縁にタッチするまで、少なくとも片手及び/又は腕を用いてキャリーする。
- 注意：「マネキンと共に浮上する（Surfacing with the Manikin¹⁹）」とは、マネキンの頭頂部が指定された5 m ラインを超える前に、少なくとも片手又は片腕でマネキンを保持したまま、競技者の頭を水表面から出さねばならないことを意味する。
- D. 競技者はマネキンと共に浮上する際、プールの底を押しても良い。競技者は壁/縁にタッチした後、そのマネキンを手放す。
- E. 水中で、競技者はフィン及びレスキューチューブを装着し、10 m チェンジオーバーゾーン内において第2 マネキンの周りにレスキューチューブを正しく装着し、そしてフィニッシュまでトウする。
- F. 競技者がプールのフィニッシュ壁/縁にタッチした時、競技は終了する。

A. マネキン、フィン及びレスキューチューブ：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。競技者は主催者が用意したマネキン及びレスキューチューブを用いなければならない。

この競技の為、キャリアに使用される第1マネキンは水で完全に満たされ、密封される。トウに用いる第2マネキンは、浮いたとき胸部の横ラインの上部が水面に来るように水が入れられ密閉される。

- B. フィン及びレスキューチューブの置き方：競技開始前に、マネキンハンドラーはフィン及

¹⁹ 【JA 注釈】 厳密には、直前の本文中の表現「surfaces the manikin」と注意の表現「surfacing with the manikin」が異なっているが、表現のバラツキの範囲内とみなす。

びレスキューチューブを、50 m ターニング縁のプールデッキ上 - スターティングブロック/台 (podium) ではない - の指定されたレーン内に置かねばならない。レスキューチューブのクリップは、マネキンに装着するまで外したままにしておく。

注意：レスキューチューブ及びそのラインは競技者の裁量で配置することができるが、競技開始前にレスキューチューブトウ用のライン/ロープを意図的に短くする目的で結ぶ/結び目を作る、又はライン/ロープ自体にクリップ留めした場合、競技者は失格となる。

- C. キャリー用マネキンの配置：この競技の為、マネキンは水で完全に満たされ、密閉される。このマネキンは 1.8 m から 3 m の間の深さに配置される。水深が 3 m を超える場合、マネキンが既定の深さに配置される為に、台（またはその他の補助）の上に配置されねばならない。マネキンは背を下にして、頭部をターニング壁へ向け、横ラインの上端が（プールの）25 m ライン上にあるように配置される。
- D. 第 1 マネキンの浮上：第 1 マネキンと共に浮上する際、競技者はプール底面を押しても良い。
- E. キャリー：競技者は、マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越える前に、マネキンを正しいキャリーポジションにせねばならない。そして、競技者は、「プール競技の一般規則」に詳述の通り、ターンエッジ/壁までマネキンをキャリーせねばならない。
- F. マネキンの配置：引渡しの際、マネキンハンドラーは、少なくとも一方の手を使って、競技者がターニング縁/壁にタッチした時点で、マネキンを指定されたレーン内のいずれかの場所で直立させ、マネキンの顔をターニング壁/縁に向くように保持していること。マネキンハンドラーは競技中故意にプールに入ってはならない。
- G. 第 2 マネキン：ターニング壁/縁にタッチし第 1 マネキンを手放した後に、競技者はフィン及びレスキューチューブを装着し、その後で第 2 マネキンを掴む。
注意：ターニング壁/縁にタッチする前に意図せず第 2 マネキンに触れることは、失格ではない。
- H. 第 2 マネキンの確保：競技者は、10 m チェンジオーバーゾーン内において、レスキューチューブをマネキンの両腕の下又は両腕に接触して胴体に巻き付け、オーリングにクリップ留めして、マネキンを正しく確保せねばならない。マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過していなければ、競技者は 10 m チェンジオーバーゾーン内に戻って、マネキンを確保し直してもよい。
注意：マネキンの頭頂部が 10 m チェンジオーバーゾーン内に残っていれば、レスキューチューブをマネキンの周りにクリップする間、立つ又は歩くことは失格ではない。
- I. レスキューチューブの装着：レスキューチューブは正しく装着せねばならない — 競技者の判断で — ランヤード/ハーネス (lanyard/harness) を片方又は両方の肩にかけるか、あるいは片方の肩から胸にかけるかする。
レスキューチューブを正しく着用していたのであれば、競技者がマネキンをトウしている間に、ランヤード/ハーネスが競技者の腕又はひじに落ちて、又は再びかけ直されても、失格の理由にはならない。
- J. マネキンをトウする：競技者は、「プール競技における一般規則」に記載の通り、マネキンをトウせねば（引っ張らなければ）ならない。レスキューチューブは、マネキンの頭頂

部が 10 m ラインを通過するまでに、マネキンに装着されねばならない。

注意 1：レスキューチューブを用いたスタートについて－マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）された場合、競技者は失格となる。

注意 2：レース実施中に、レスキューチューブのラインがマネキンに巻き付く又は競技者により短くされても、競技者は失格にならないこととする。

- K.** 10 m ラインにおいてレスキューチューブが「正しく装着され」、マネキンの顔が水面より上にあれば、マネキンをトウしている間にレスキューチューブがずれても失格にはならない。
- L.** マネキンがレスキューチューブ内で回転しても、マネキンの顔が水面より上に残っている限り、競技者は失格とならない。マネキンが 10 m ライン時点で正しく確保され、且つマネキンの顔が水面より上に残っていれば、マネキンの頭を先にしてトウされる必要はない。
- M.** 落としたフィンの回収：競技者は、マネキンの扱い方に関する競技規則に反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、失格とはならず、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。
- N.** レスキューチューブの不具合：レース中、レスキューチューブ、紐及び/又はハーネス（ベルト）に技術的な不具合があるとチーフレフリーが判断すれば、チーフレフリーはその競技者を別のヒートで再スタートさせてもよいが、それは、レスキューチューブが主催団体から提供され、全ての競技者は提供されたレスキューチューブを使わねばならない規則になっている場合に限る。

13.3. 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 第 1 マネキンに向かって水に潜る前に、浮上しない場合 (DQ15) ,
- B. プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品）を補助として用いた場合－但し、マネキンを浮上させる際にプールの底面を使用する事を除く (DQ17) ,
- C. マネキンの頭頂部が 5 m ピックアップゾーンを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションにしなかった場合 (DQ18) ,
- D. 「S3-3 マネキン」の解説のように、正しくないキャリー方法を用いた (DQ19) ,
- E. ターニング壁/縁にタッチする前に第 1 マネキンを放した場合 (DQ21) ,
- F. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過する前で、プールが浅くてマネキンにチューブを装着する間競技者が立つことができる場合を除いて、レスキューチューブを（ヴィクティムとしての）マネキンに巻き付ける際、プールの付属品（例：レーンロープ、ステップ、水中ホッケーの備品等）を補助として用いた場合 (DQ24) ,
- G. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、レスキューチューブのクリップを O 型リングにかけた場合 (DQ28) ,

- H. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、マネキンハンドラーがマネキンを放した場合 (DQ26) ,
- I. マネキンハンドラーが競技中故意に水に入った場合、又は水に入り他の競技者のパフォーマンスを妨害した場合、又は競技の判定を妨害した場合 (DQ27) ,
- J. 50 m 地点で競技者が意図的に第 2 マネキンに触れる前に、プールの壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ25) ,
- K. レスキューチューブを正しくマネキンに巻き付けて確保しなかった場合 (即ち、マネキンの胴体及び両腕の下又は両腕に接触して巻いていない、及びクリップをオーリングにかけていない) (DQ29) ,
- L. マネキンの頭頂部で判定して 10 m チェンジオーバーゾーン内にあるうちに、マネキンにレスキューチューブを巻きつけて確保しなかった場合 (DQ30) ,
- M. マネキンをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短くされた場合 (DQ32) ,
- N. マネキンの顔が水面下にある状態でトウした場合 (DQ20) ,
- O. マネキンをトウせずに押す又はキャリーした場合 (DQ31) ,
- P. レスキューチューブがマネキンの周りに正しく装着された後、レスキューチューブとマネキンが離れた場合 (DQ33) ,
- Q. レスキューチューブとマネキンが所定の位置にない状態でフィニッシュ壁/縁にタッチした場合 (DQ34) ,
- R. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) 。

14. ラインスロー 12.5 m LINE THROW- 12.5 m

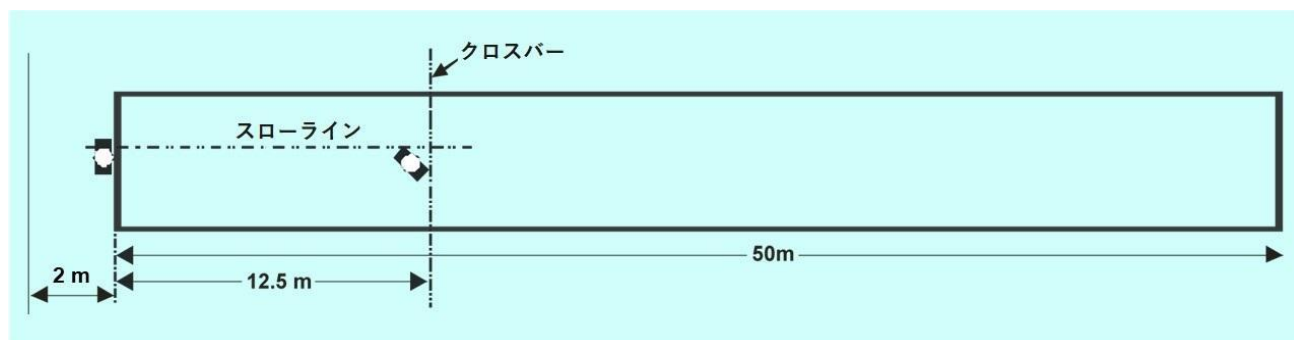


図 8 : ラインスロー 12.5 m

14.1 競技の説明 Event description

この競技に於いて、競技者（「レスキューアー」）は、プールの縁のスローゾーンから重りの付いていない 1 本のライン/ロープを、（プールの端から）12.5 m の距離にある硬いクロスバーの手前の水中にいる仲間のチームメンバー（「ヴィクティム」）に投げる。レスキューアーはその「ヴィクティム」をプールのフィニッシュ壁/縁まで引っ張って（「手繰り寄せて」）²¹戻す。

スタートの合図と共に、レスキューアーはロープを回収し、それをヴィクティムに投げ返す。正しい投げ方（a fair throw）であればヴィクティムはロープを掴み、そして競技者はヴィクティムをプールのフィニッシュ壁まで引き戻す。

ヴィクティムはスイム・ゴーグルを着用してよい。

A. スローゾーン：

スローゾーンとは、各チームに割り当てられたレーンにより囲われた領域である。これはプール壁の垂直エッジ（縁）からチームのレーンの手前側に広がり、チームのレーンのレーンロープ（lane ropes）中心を延長した印付けられていないラインで両サイドが決まり、プールデッキのエッジ（縁）又は隆起したプラットフォームまで広がっている。スローゾーンの後方ラインは、スローと手繰り寄せに支障が無いよう、プール壁の垂直エッジ（縁）から 2 m 後方である²³。

後方ラインは、チーム及びオフィシャルのための参照としてマークされるものである。ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチするまでレスキューアーが手繰り寄せている間、自チームのスローゾーンの床の上又は上空のいずれかに於いて、マークされたスローゾーン後方 2 m ラインの内側に、レスキューアーが少なくとも片足を完全に入れ続けている限り、レスキューアーがこのエリア内で後方に移動するのは失格ではない。

注意：プールの設計によっては、プールのエッジから後方 2 m のラインが、隆起したプール端又は隔壁/ポンツーン（bulkhead/pontoon）の幅を超えたところにある場合がある、つまり、いかなる隔壁/ポンツーンもプールエッジから 2 m の範囲の一部を構成する。レ

²¹ 【JLA 脚注】単純に pull（引く）だけでなく、haul in（手繰り寄せる／一刻を争う状況で必死にロープを手繰り寄せる）のニュアンスが加えられている。

²³ 【JLA 注釈】2023～2024 年版ではスローゾーンの後方の広がりには制限がなかったが、2025 年版から後方ライン（2.0 m）が復活した。

スキューアーは、スローゾーン内にいる限り、競技中いつでもプールの盛り上がった縁に足をかけることが許される。

B. 制限時間 (Time Limit)

レスキューアーは、この競技で認められている 45 秒の制限時間内に公正にスローし、フィニッシュ壁/縁までヴィクティムを手繰り寄せねばならない。

スローが届かなかった又は割り当てられたレーン外に落ちた場合、レスキューアーはライン/ロープを回収し、制限時間 45 秒内であればヴィクティムの確保に必要なだけ再度スローしてよい。

45 秒の音による完了合図の前にヴィクティムをフィニッシュ壁/縁まで連れてこられなかったレスキューアーは、「Did Not Finish (DNF)」と示される。

C. スタート :

スタートの準備 : 1 回目のホイッスルで、競技者ら (即ち、レスキューアー及びヴィクティム) はスタートの準備をする。

レスキューアーは一方の手でライン/ロープの一方の端だけを持つ。

「ヴィクティム」はライン/ロープのもう一方の端を持ち水に入りクロスバーの (フィニッシュ壁/縁に) 近い側まで進む。この時ライン/ロープは、ヴィクティムとレスキューアーの間で伸びている。余ったライン/ロープは 12.5 m クロスバーマークを超えて伸ばされている。余ったラインはクロスバーの上又は下を通過してよい。

2 回目のホイッスルで、レスキューアーは遅滞なくスタートの位置に着く。全ての競技者がスタートの位置に着いて、且つ、静止したとみなされたとき、スターターは号令「Take your marks」を発する。全てのレスキューアー及びヴィクティムが静止したとき、スターターは音によるスタートの合図を発する。

注意 : スタートの前に投げる練習は許されない。

スタートの姿勢 : レスキューアーは、スタートのためにスローゾーン内で自由に位置を取ることができ、ライン/ロープを片手又は両手で持つことができる。スローライン/ロープの端は片手で持たねばならない。

注意 1 : レスキューアーとヴィクティムとの間のライン/ロープに振れ (よじれ) があるのは許容されるが、ラインにループができるのは認められない。また、レスキューアーの両手の間のロープに振れが生じるのは許容されるが、ループは認められない。

注意 2 : ロープの端を握っている手の周りにライン/ロープを巻き付けることは許されていない。

自身に指定されたレーンの固いクロスバーの手前側に位置しているヴィクティムは、クロスバーを片手又は両手で掴む。競技のスタート時、ヴィクティムはスローライン/ロープに触れている必要はない。

レスキューアーはライン/ロープを回収し、ヴィクティムに投げ返したら (ヴィクティムがそれを掴み)、ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチするまで水中のヴィクティムを手繰り寄せる。

D. 公正なスロー (Fair Throw)

公正なスローとは、ヴィクティムが、スローされた (投げられた) ロープ/ラインを自分

らに指定されたレーンの内側でのみ自分の手で掴むことができるスローである。

注意：スローされたスローライン/ロープがレーンロープの上に載っているのは、指定されたレーン内ではなく公正なスローではない²⁴。しかしながら、そのスローライン/ロープの一部がチームに指定されたレーン内にあり、チームに指定されたレーン内にあるそのスローライン/ロープの一部をヴィクティムが掴むことができる場合は、公正なスローである。

E. ライン/ロープを掴むヴィクティム：

ヴィクティムは、公正なスローである場合に限り、ライン/ロープを掴む又は手繰り寄せてもよい。

ヴィクティムは、クロスバーに沿って手をどこにでもスライドすることができるが、体のどこかがライン/ロープに触れるとき、そしてライン/ロープを掴むとき、クロスバーを掴んでいなければならない。

ヴィクティムが指定されたレーン内に完全に留まり、クロスバーを掴んで離さない限り、ヴィクティムは足又は身体他の部分を使って、自身のレーン内にあるスローライン/ロープを、手で掴める場所まで操作しても良い。

スローライン/ロープに到達しようとしてクロスバーを引っ張ることに対してペナルティーは無い。

注意：ヴィクティムは、スタートの合図の後クロスバーを離してもペナルティーは無いが、身体いずれかの部分を使ってライン/ロープを集めるようとする又は一方の手で掴もうとするときは、クロスバーを他方の手で掴んでいなければならない。

F. 手繰り寄せ及びフィニッシュ

プールのフィニッシュ縁まで手繰り寄せられている間、ヴィクティムは前を向いた状態で、且つ両手でスローライン/ロープを掴んでいなければならない。ヴィクティムはスローライン/ロープを「登るように (climb)」手繰り寄せてはならない。安全上の理由により、ヴィクティムが壁/縁にタッチするために、一方の手をスローライン/ロープから放してもよい。これは失格にはならない。

注意 1：ロープを「登るように (climbing)」手繰り寄せるとは、レスキューアが持っているロープの端に向かって、ヴィクティムが両手を使って移動していくことと定義される。

ライン/ロープレスキューアは、腕を使ってヴィクティムを引き寄せなければならない。ヴィクティムをフィニッシュまで引き寄せている間、後方 2 m ラインまでの後退は許可されるが、レスキューアは以下のことは行ってはいけない：

- スローライン/ロープを手握ったまま歩く又は走ること、
- ヴィクティムを手繰り寄せている間、スローラインを身体いずれかの部分に巻きつけて保持すること、

²⁴ 【JLA 注釈】原文が十分推敲されていない：A thrown line/rope lying over a lane rope is not “within a designated lane is not a fair throw.”

- ヴィクティムをフィニッシュ壁/縁に手繰り寄せている間、マークされた後方 2 m ラインを越えて後方に移動すること。

注意：ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチするまでに、自チームのスローゾーンの床の上又は上空のいずれかに於いて、スローゾーンのマークされた後方 2 m ラインの内側に、レスキューアが少なくとも片足を完全に入れ続けている限り、2 m 後方ラインマークまでのいかなる後方への移動も失格ではない。

ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチした後、レスキューアが自分のスローゾーンを出てもチームは失格にはならないが、当該レースの他チームへいかなる妨害でも引き起こした場合、チームは失格となる。

ヴィクティムはフィニッシュ縁にタッチした後退水してはならず、自分のレーンに留まらねばならない。任命されたオフィシャルがレース完了の音による合図を出す前に、ヴィクティムが腰を超えて水から出ようとする、又は、プール縁又はレーンロープに座ると、チームは失格となる。

G²⁶. スローゾーンの条件：

レスキューアは、他の競技者の妨害をしてはならない。

ライン/ロープレスキューアは、他の競技者に干渉しない限り、スローゾーン外又はプール内に落ちたライン/ロープを回収するため手を伸ばしてもよい。

水に入った（又は落ちた）レスキューアは失格となる。

ジャッジの観点からすると、ヴィクティムを引き寄せている間、競技者は自分のレーン内に留まることが求められる。しかしながら、ヴィクティムが壁にタッチしてフィニッシュ結果が記録されるまで手繰り寄せている間の後方 2 m ラインの（競技者の足の）ジャッジを除いて、特定のエリア内での足がラインに乗っているかという位置の問題ではなく、むしろ、競技中に他チームを妨害していないかが重視される。

注意：定義として、スローゾーン内に留まるとは、ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチするまで競技者が手繰り寄せている間、レスキューアが少なくとも一方の足をマークされた後方 2 m ラインの内側又はライン上、又はそれらの上空に留まることをいう。

14.2 器材 Equipment

- A. スローライン/ロープ：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。スローライン/ロープの長さは 16.5 m から 17.5 m でなければならない。競技者は主催者が用意したスローラインを用いなければならない。
- B. 硬い（曲がらない）クロスバーを、スタート側のプールの端から 12.5m 地点の水面に各レーンを横断するように設置する。許容差は各レーンに於いてプラス 100 mm、マイナス 0.00 mm である。

14.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-2 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

²⁶ 【JLA 注釈】この G 項は、原文では F 項と誤記されている。

- A. (ライン/ロープ) レスキューアー²⁷が投げる練習をした場合 (DQ52) ,
- B. ヴィクティムが、フィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せてもらうライン/ロープを、身体の内
づれかの部分を使って回収又は掴む時に、手でクロスバーを掴み続けていなかった場合
(DQ45) ,
- C. ヴィクティムが自分のレーンの外にあるスローライン/ロープを掴んだ場合 (DQ48) ,
- D. ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せられている間、前を向いていなかった
場合 (DQ49) ,
- E. ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せられている間、両手でスローライン/ロ
ープを掴んでいない場合 (ヴィクティムは壁/縁にタッチするために一方の手をスローラ
イン/ロープから放してもよい) (DQ60) ,
- F. ヴィクティムが引っ張られている間、スローライン/ロープを手繰り寄せた場合
(DQ51) ,
- G. (ライン/ロープ) レスキューアーが、スタートの合図からヴィクティムがフィニッシュ壁/
縁にタッチするまでの間に、指定されたスローゾーンを出た場合 (DQ46) ,
- H. (ライン/ロープ) レスキューアーが、ヴィクティムをプールのフィニッシュ壁/縁に戻すた
め、腕を使って手繰り寄せず、ライン/ロープを手で掴んで又は身体の内づれかの部分に
巻き付けて歩いた又は走った、又は後方 2 m ラインマークを超えた場所で手繰り寄せた場
合 (DQ47) ,
- I. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) 。

²⁷ 【JLA 注釈】 ILS 競技規則 2025 (Sep., 2025 発効版) までは "Line/Rope Thrower" (ライン又はロープを投げる人) の
表記であったが、ILS 競技規則 2025 (May, 2026 改訂版) では、"Thrower"のみを "rescuer" と修正したため "Line/Rope"
意味をなさずに残ってしまっている。G, H 項も同様。

15. マネキンリレー (4×25 m) MANIKIN RELAY (4 x 25 m)

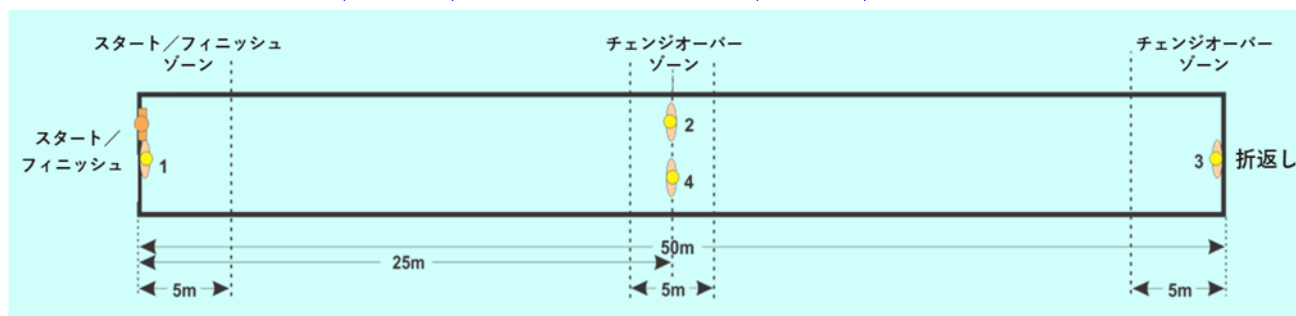


図 9：マネキンリレー (4×25 m)

15.1 競技の説明 Event description

競技者 4 人が順に約 25 m ずつマネキンをキャリーする。

- A. 第 1 の長いホイッスルにより全ての競技者は水に入る。第 2 の長いホイッスルにより全ての競技者はむやみに遅滞せずスタートの準備をする。
- B. 第 1 競技者は一方の手及び/又は腕でマネキンを保持し、もう一方の手でスタート壁/縁又はスターティングブロックを掴み、第 2, 第 3, 第 4 競技者はそれぞれ 25 m, 50 m, 75 m 地点の水中にいる。
- C. スターターは、全ての競技者がスタート位置についたら、「Take your marks」の号令を出す。
- D. スターターは、(すべての) 第 1 競技者が静止したら音によるスタートの合図をする。
- E. 第 1 競技者：第 1 競技者は少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンを運び、22.5 m 地点から 27.5 m 地点の間の 5 m のチェンジオーバーゾーン内で第 2 競技者に手渡す。
- F. 第 2 競技者：第 2 競技者は、ターニング壁/縁にタッチするまで、少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンを運び、少なくとも一方の手でターニング壁/縁に触れている第 3 競技者にマネキンを手渡す。
- G. 第 3 競技者：第 3 競技者は、第 2 競技者がターニング壁/縁又はスターティングブロックにタッチする前に一方の手でマネキンにタッチ又はマネキンを掴んでも良いが、第 2 競技者がターニング壁/縁にタッチするまでは、少なくとも一方の手によるターニング壁/縁又はスターティングブロックとの接触を解いてはならない。
- H. 第 3 競技者は少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンを運び、72.5 m 地点から 77.5 m 地点の間のチェンジオーバーゾーン内で第 4 競技者にマネキンを手渡す。
- I. 第 4 競技者：第 4 競技者は少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンを運び、競技者の身体のいずれかの部分でフィニッシュ壁/縁をタッチすることで競技を完了する。
- J. マネキンを運んで来る競技者と、それを受け取る競技者だけが、彼らのチェンジオーバーゾーンでのマネキンの手渡しに参加できる。マネキンを運んで来た競技者は、マネキンの頭頂部がチェンジオーバーゾーン内にある限り、マネキンを受け取る競技者を補助してもよい。
- K. 常に (少なくとも) 1 人の競技者の手及び/又は腕がマネキンに触れていなければならない。

- L. スタートとリレーのチェンジオーバーゾーンは、旗、ポール又は三角コーン²⁸で示される。
- M. マネキンを受け渡しする競技者は、チェンジオーバーゾーン内でプールの底を押しても（蹴っても）よい。
- N. スタートゾーン及びチェンジオーバーゾーン内では（S3-3 で定義した）「マネキンをキャリアする」規準で判定されないが、競技者はマネキン受け渡し中を含め常に少なくとも一方の手及び/又は腕でマネキンに接触し続ける必要がある。
- 注意：（S3-3 で定義した）標準的な「マネキンを運ぶキャリアする」規準は、リレーの最終競技者のフィニッシュに適用される。
- O. マネキンの受け渡しは指定されたチェンジオーバーゾーン内で行わなければならないが、それはマネキンの頭頂部で判定する。
- P. 状況が許す場合、且つ、オフィシャルの指示の下、リレーの自分の区間を終えた第 1、第 2、及び第 3 競技者は水から上がってよい。競技者らは、他の競技者の邪魔にならぬよう、プールの最も近いサイドへ（レーン）横断して水から上がるものとする。競技者は、再度水に入ってはならない。
- Q. 第 4 競技者は、オールクリアの合図が出るまで水から出てはいけない。

15.2 器材 Equipment

マネキン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。マネキンは水を一杯に入れ密閉する。競技者は主催者が用意したマネキンを用いなければならない。

15.3 失格 Disqualification

- 「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：
- A. 「S3-3 マネキン」の解説のように、マネキンを正しくない方法で運んだ（DQ19），
- B. マネキンを確保して水面に浮上する際、プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品）を補助として用いた場合 — ただし、プールの底は含まれない（DQ17），
- C. 第 2 競技者が壁/縁にタッチする前に第 3 競技者がターニング壁/縁/スターティングブロックとの接触を解いた場合（DQ37），
- D. 指定されたチェンジオーバーゾーンの手前又はそれを越えた場所でマネキンが受け渡された場合（DQ38）。
- E. （チェンジオーバーゾーンに）入ってくる競技者と出ていく競技者の引継ぎ中に、他の競技者から補助を受けた場合（DQ35），
- F. 次の競技者がマネキンを掴む前に、競技者がマネキンを放した場合（即ち、各競技者の一方の手及び/又は腕がマネキンに触れていなければならない）（DQ39），
- G. マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリアポジションにしなかった場合（DQ18），
- H. ターニング壁/縁又はフィニッシュ壁/縁にタッチする前にマネキンを放した場合（DQ21），

²⁸ 【JLA 注釈】いわゆるロードコーン（road cone），パイロン（pylon）と呼ばれるもの。

- I. 競技者がフィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) ,
- J. 競技者が, リレーの自分の区間を完了した後, 再び水に入った場合 (DQ 44) ,
- K. 1 人の競技者が, 2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合 (DQ36) 。

16. 障害物リレー (4×50 m) OBSTACLE RELAY (4 x 50 m)

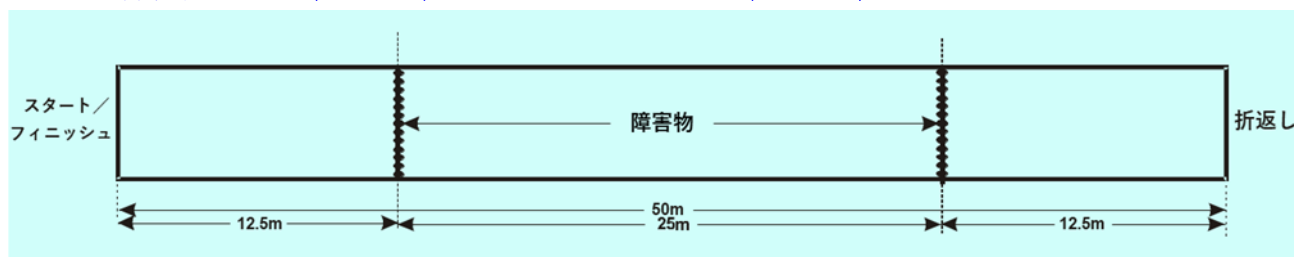


図 10：障害物リレー (4×50 m)

16.1 競技の説明 Event description

競技者 4 人が順に障害物の下をくぐりながら 50 m ずつ泳ぐ。

- A. 第 1 競技者：音による合図で第 1 競技者は飛び込みスタートし、2 つの障害物の下を通過しながら自由形で 50 m 泳ぐ。
- B. 第 2, 第 3, 第 4 競技者：第 1 競技者がターニング壁/縁にタッチした後、第 2, 第 3, 第 4 競技者が順に同じ手順を繰り返す。
- C. 飛び込後、全ての競技者は最初の障害物の前までに、及び各障害物の下を潜った後、水面に浮上しなければならない。「水面に浮上する」とは競技者の頭が水面を突き破って浮上することを意味する。

注意：水泳中に「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水平面から出なければならないことを意味する。

- D. 競技者は各障害物の下から水面に浮上する際、プールの底を蹴っても押してもよい。
- E. 障害物に向かって泳ぐ又はぶつかるのは失格に至る行為ではない。
- F. 状況が許す場合、且つ、オフィシャルの指示の下、リレーの自分の区間を終えた第 1, 第 2, 及び第 3 競技者は水から上がってよい。競技者らは、他の競技者の邪魔にならぬよう、プールの最も近いサイドへ (レーン) を横断して水から上がるものとする。競技者は、再度水に入ってはならない。

16.2 器材 Equipment

障害物：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。障害物は全レーンにまたがってまっすぐな線を描くようにレーンロープと垂直に固定する。最初の障害物はスタートの壁から 12.5 m 地点に設置し、2 番目の障害物は逆のサイドから 12.5 m 地点に設置する。2 つの障害物の距離は 25 m とする。

16.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-2 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 障害物の上を通過し、ただちに障害物の上又は下を戻り、その後下を潜り直さなかった場合 (DQ11) ,
- B. 飛び込んだ後、又は、障害物の下を潜る前及び後、水面に浮上しなかった場合 (DQ12) ,
- C. 水面に浮上する際、プールの付属品 (レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品等) を補助として用いた場合 — ただし、プールの底は含まれない (DQ17) ,
- D. 前の競技者が壁にタッチする前に次の競技者がスターティングブロックから離れた場合

(DQ37) ,

- E. 競技者がフィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) ,
- F. 競技者が, リレーの自分の区間を完了した後, 再度水に入った場合 (DQ44) ,
- G. 1 人の競技者が, 2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合 (DQ36) 。

17. メドレーリレー (4×50 m) MEDLEY RELAY (4 x 50 m)

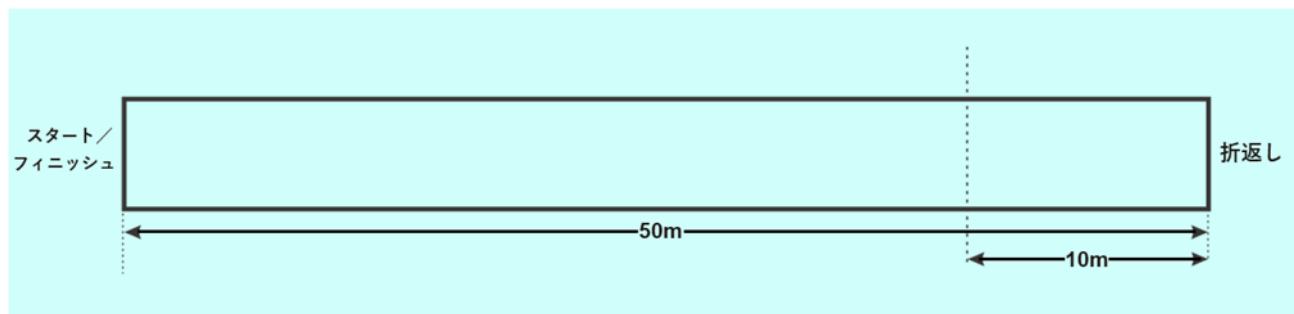


図 11：メドレーリレー (4×50 m)

17.1 競技の説明 Event description

- A. 競技者 4 人が順に異なる課題をこなしながら 50 m ずつ泳ぐ。

第 1 競技者：第 1 競技者は、フィン装着せずに音による合図で飛び込みスタートし、自由形で 50 m 泳ぐ。第 1 競技者は、ターニング壁/縁にタッチする前に、水面上に出ねばならない。

注意：水泳中に「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水平面から出ねばならないことを意味する。

- B. 第 2 競技者：フィン装着した第 2 競技者は、第 1 競技者がターニング壁/縁にタッチした後飛び込みスタートし、自由形で 50 m 泳ぐ。第 2 競技者はターニング壁/縁にタッチする前に水面を突き破って浮上する必要はない。

- C. 第 3 競技者：第 3 競技者は、第 2 競技者が壁/縁にタッチした後飛び込みスタートし、フィンを装着せずレスキューチューブを引いて自由形で 50 m 泳ぐ。第 3 競技者はターニング壁/縁にタッチする。

注意：レスキューチューブ及びそのラインは、チェンジオーバーのために競技者の裁量で配置することができるが (競技者の身体に巻きつけられたライン/紐、水着に挟み込まれたもの等を含む)、競技開始前にレスキューチューブトウ用のライン/ロープを意図的に短くする目的で結ぶ/結び目を作る、又はライン/ロープ自体にクリップ留めした場合、競技者は失格となる。

- D²⁹ 第 4 競技者：(フィン装着した) 第 4 競技者は、水中に於いて少なくとも一方の手でターニング壁/縁又はスターティングブロックに触れ、ハーネスを着用する。第 4 競技者は、第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、レスキューチューブ、そのハーネ

²⁹ 【JLA 注釈】D の第 1 文と第 2 文は矛盾しているようにも見えるが、ILS 競技規則委員会の見解は以下の通り：

- ・第 4 競技者は、水中に於いて少なくとも一方の手でターニング壁/縁又はスターティングブロックに触れた状態で待機する、
- ・第 4 競技者は、第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、レスキューチューブ、そのハーネス又は紐に一方の手で触れる又は掴んでもよいが、第 3 競技者が縁にタッチするまでターニング壁/縁又はスターティングブロックに少なくとも一方の手を接触させておかねばならない、
- ・第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチした後であれば、第 4 競技者がハーネスに触れる際、ターニング壁/縁に手を触れておく必要はない。

詳細は文献[10]を参照のこと。

ス又は紐に一方の手で触れる又は掴んでもよいが、第 3 競技者が縁にタッチするまでターニング壁/縁又はスターティングブロックに少なくとも一方の手を接触させておかねばならない。第 4 競技者は手、腕、又は足で壁/縁を押してもよい。

E. 第 3 競技者は「ヴィクティム」の役割を演じ、第 4 競技者にフィニッシュまで 50 m トウされている間、レスキューチューブ及び/又はクリップを両手で掴む。

F. 「ヴィクティム」の頭頂部が 10 m ラインを越えるときには、ヴィクティムはレスキューチューブを正しく掴んでなければならない。

注意 1: 第 3 及び第 4 競技者は、ターニング縁にタッチした後、且つヴィクティムの頭部が 10 m ラインを通過する前で、ヴィクティムがレスキューチューブと接触していれば、立つ/歩くことが認められている。

注意 2: 第 3 競技者のチェンジオーバーについて - ヴィクティムをトウするためレースの第 3 競技者区間の開始前に、レスキューチューブのトウ用ライン/ロープが意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）された場合、チームは失格となる。

注意 3: レース実施中に、レスキューチューブのラインがヴィクティムに巻き付く又は競技者により短くされても、競技者は失格にならないこととする。

G. ヴィクティムはトウされている間キックしてよいが、第 4 競技者にその他の助力を与えることは許可されない。

H. ヴィクティムはレスキューチューブ本体及び/又はクリップを掴まなければならない - 紐ではない。

I. ヴィクティムは、トウされている間、レスキューチューブ（本体）及び/又はクリップを両手で掴まなければならないが、トウされている間にチューブ（本体）及び/又はクリップ上で手の位置を変えても失格とはならない。

J. チューブに触れているヴィクティムを伴って第 4 競技者がプールのフィニッシュ壁/縁にタッチした時、競技は完了する。

K. 状況が許す場合、且つ、オフィシャルの指示の下、リレーの自分の区間を終えた第 1、第 2 及び第 3 競技者は水から上がってよい。競技者らは、他の競技者の邪魔にならぬよう、プールの最も近いサイドへ（レーン）を横断して水から上がるものとする。競技者は、再度水に入ってはならない。

17.2 器材 Equipment

A. レスキューチューブ、スイムフィン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。競技者は主催者が用意したレスキューチューブを用いなければならない。

B. スタート時のレスキューチューブ：第 3 競技者のスタートにおいて、レスキューチューブ本体と紐は、競技者に指定されたレーン内であれば、競技者の判断で好きに配置してよい。競技者は、レスキューチューブと紐が安全で正しく配置されるようにせねばならない。レスキューチューブのクリップは常に外したままにしておく。

- C. **レスキューチューブの装着**：レスキューチューブは正しく装着せねばならない³⁰ — 競技者の判断で、**ランヤード/ハーネス (lanyard/harness)** を片方又は両方の肩にかけるか、あるいは片方の肩から胸にかけるかする。レスキューチューブを正しく着用していたのであれば、競技者がアプローチする又はトウしている間にランヤード/ハーネスが競技者の腕又はひじに落ちて**又は再びかけ直されても**、失格の理由にはならない。
- D. **ヴィクティムをトウする**：ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを越えるときには、ヴィクティムは、レスキューチューブ及び/又はクリップを正しく掴んでいなければならない。
- E. **落としたフィンの回収**：競技者は、（マネキンが当該区間で使用されている場合）マネキンの扱い方に違反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。
- F. **レスキューチューブの不具合**：レース中、レスキューチューブ、紐及び/又はハーネス（ベルト）に技術的な不具合があるとチーフレフリーが判断すれば、その競技者を別のヒートで再スタートさせてもよいが、それは、レスキューチューブが主催団体から提供され、全ての競技者は提供されたレスキューチューブを使わねばならない規則になっている場合に限る。

17.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. **第 1 競技者が、飛込みスタートの後からターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない場合 (DQ16)** ,
- B. **前の競技者が壁/縁にタッチする前に、スターティングブロックを離れた場合、又は、ターニング壁/縁/スターティングブロックとの接触を解いた場合 (DQ37)** ,
- C. **競技者がレスキューチューブのクリップをリングにかけた場合 (DQ40)** ,
- D. **ヴィクティムがレスキューチューブの紐を掴んでいる場合 (DQ41)** ,
- E. **ヴィクティムが腕を動かして協力したり、又はレスキューチューブ及び/又はクリップを両手で掴んでいない場合 (DQ42)** ,
- F. **10 m ラインを越えた後に、ヴィクティムがレスキューチューブ (又はクリップ) を保持していない又は放してしまった場合 (DQ43)** ,
- G. **1 人の競技者が、2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合 (第 3 競技者がヴィクティムになることを除く) (DQ36)** ,
- H. **フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14)** ,
- I. **競技者が、リレーの自分の区間を完了した後に再度水に入った場合 (DQ44)** 。

³⁰ 【JLA 注釈】第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に故意にレスキューチューブのハーネスを掴んで肩から外す行為は失格になり得る。参考：JLA 通達「第 2024-S004 号 メドレーリレーの第 3 競技者のレスキューチューブ取り扱いに関する注意喚起 (2024 年 5 月 3 日)」[11]。

18. プールライフセーバーリレー (4×50 m) POOL LIFESAVER RELAY (4 x 50 m)

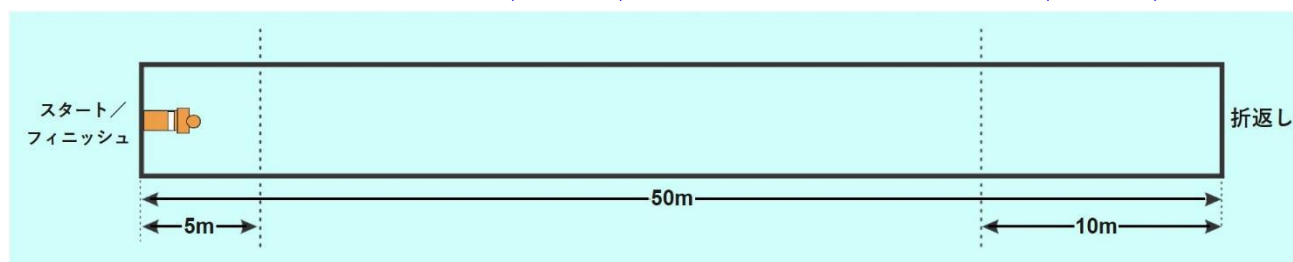


図 12：プールライフセーバーリレー (4×50 m)

18.1 競技の説明 Event description

競技者 4 人が順に異なる課題をこなしながら 50 m ずつ泳ぐ。

- A. **第 1 競技者**：音による合図で第 1 競技者は飛込みスタートし、フィンを付けずに自由形で 50 m 泳ぐ。

注意 1：第 1 競技者は、ターニング壁/縁にタッチする前に、水面に出ねばならない。

注意 2：水泳中に「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水平面から出ねばならないことを意味する。

- B. **第 2 競技者**：第 2 競技者はフィンを付け、第 1 競技者が壁/縁にタッチした後飛込みスタートして 50 m 泳ぎ、潜って水中のマネキンを引き上げる。第 2 競技者は、第 3 競技者へマネキンを引き継ぐ前に (又は後で)、ターニング縁にタッチする必要はない。

注意：第 2 競技者は、マネキンと共に水面に浮上するまでの全区間水中を泳いでもよい、又は、スタートしてからマネキンを引き上げるため潜る前までに、1 回以上水面に浮上してもよい。

- C. **第 3 競技者**：第 3 競技者は少なくとも一方の手でターニング壁/縁又はスターティングブロックに接触し、水中でフィンをつけずに待機しておく。第 3 競技者は、マネキンの頭部が水面に浮上する前に、一方の手及び/又は腕でマネキンに触れても又は掴んでもよい。マネキンの頭頂部が水面に浮上した後、第 3 競技者は、ターニング壁/縁又はスターティングブロックとの接触を解いてよい。第 2 競技者は、マネキンと共に浮上するときターニング壁/縁にタッチする必要は無いが、第 3 競技者がマネキンを掴むまで第 2 競技者はマネキンを離してはいけない (即ち、少なくとも 1 人の競技者の手及び/又は腕が常にマネキンと接触していなければならない)。そして第 3 競技者は少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンを 50 m キャリーし、マネキンを第 4 競技者に引き継ぐ前に、壁/縁にタッチする。

注意：第 3 競技者がターニング壁/縁との接触を解除する前に、マネキンの頭部は水面から出ておかねばならない。

- D. **第 4 競技者**：(フィンを装着した) 第 4 競技者は水中に於いて、ターニング壁/縁又はスターティングブロックに少なくとも一方の手で接触しておく。第 4 競技者は、第 3 競技者が壁/縁にタッチする前に、一方の手及び/又は腕でマネキンに触れても又は掴んでもよい。第 4 競技者は、第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチするまで、ターニング壁又はスターティングブロックとの接触を解いてはならない、そして、第 4 競技者がマネキンを掴むまで第 3 競技者はマネキンを離してはいけない (即ち、各競技者の一方の手及び/又は腕が常にマネキンと接触していなければならない)。

は腕が常にマネキンと接触していなければならない)。そして第 4 競技者は少なくとも一方の手及び/又は腕を用いてマネキンをキャリーし、競技者の体のいずれかの部分でフィニッシュ壁/縁にタッチする。

- E. (チェンジオーバーゾーンに) 入って来る第 2 及び第 3 競技者は、出ていく競技者を補助してもよいが、それはマネキンの頭頂部がチェンジオーバーゾーン内にある場合に限る。
- F. マネキンキャリー区間のチェンジオーバーゾーンは旗、ポール又は三角コーン³²で示される：
- 第 2 競技者から第 3 競技者への引継ぎ - プール壁から 5 m,
 - 第 3 競技者から第 4 競技者への引継ぎ - プール壁から 10 m.
- G. 競技者は以下 (の地点) ではマネキンを正しいキャリーポジションにせねばならない：
- 第 3 競技者 - プール壁から 5 m
 - 第 4 競技者 - プール壁から 10 m
- H. 競技者は、次の競技者がマネキンを掴むまで、マネキンから手を放してはならない (すなわち、各競技者は、一方の手及び/又は腕がいつもマネキンに触れていなければならない)。
- I. マネキンの頭頂部がチェンジオーバーゾーン内にあれば、第 3 競技者及び第 4 競技者は「マネキンをキャリーする」規則 (S3-3 で定義) は適用されない。「マネキンをキャリーする」規則は、リレーの最後のフィニッシュゾーン内でも適用される。
- J. 第 3 競技者及び第 4 競技者は、それぞれの区間でマネキンを受け取った後、プールの壁を手、腕又は足で押してもよい。
- K. 第 4 競技者がマネキンを正しく運び、競技者の身体の一部でフィニッシュ壁/縁にタッチすることで競技完了となる。
- L. 状況が許す場合、且つ、オフィシャルの指示の下、リレーの自分の区間を終えた第 1, 第 2, 及び第 3 競技者は水から上がってよい。競技者らは、他の競技者の邪魔にならぬよう、プールの最も近いサイドへ (レーン) を横断して水から上がるものとする。競技者は、再度水に入ってはならない。
- M. 落としたフィンの回収：競技者は、(マネキンが当該区間で使用されている場合) マネキンの扱い方に違反していない限り (「S3-3 マネキン」を参照)、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続することができる。競技者は、別のヒートで再度スタートすることはできない。
- 注意：LWC では、各チームは男性 2 人、女性 2 人から構成される³³。
- N. 男女が泳ぐ順番はチームが選んでよい。

18.2 器材 Equipment

マネキン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。マネキンは水を一杯に入れ密閉する。競技者は主催者が用意したマネキンをを用いなければならない。

スイムフィン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照のこと。

³² 【JLA 注釈】いわゆるロードコーン (road cone)、パイロン (pylon) と呼ばれるもの。

³³ 【JLA 脚注】JLA 主催競技会でも、各チームは男性 2 人、女性 2 人から構成される。

18.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-3 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 第 1 競技者が、飛込みスタートの後からターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない場合 (DQ16) ,
- B. 「S3-3 マネキン」の解説のように、マネキンを正しくない方法で運んだ (DQ19) ,
- C. プールの付属品 (レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品等) を補助として用いた場合 — ただし、プールの底は含まれない (DQ17) ,
- D. 第 3 競技者が、チェンジオーバーの間でマネキンの頭部が水面に浮上する前に、ターニング壁/縁との接触を解いた場合 (DQ53) ,
- E. マネキンの頭頂部が 5 m ラインを通過する前までに、第 3 競技者がマネキンを正しいキャリーポジションにしなかった場合 (DQ18) ,
- F. (チェンジオーバーゾーンに) 入ってくる競技者と出ていく競技者との間の引継ぎ中に、他の競技者から補助を受けた場合 (DQ35) ,
- G. 次の競技者がマネキンを掴む前に、競技者がマネキンを放した場合 (すなわち、各競技者の一方の手及び/又は腕がマネキンと接触していなければならない) (DQ39) ,
- H. マネキンの頭頂部が 10 m ラインを通過する前に、第 4 競技者がマネキンを正しいキャリーポジションにしなかった場合 (DQ23) ,
- I. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) ,
- J. 1 人の競技者が、2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合 (DQ36)
- K. 第 3 競技者を除いて、前の競技者が壁/縁にタッチする前に、スターティングブロックを離れた場合、又は、ターニング壁/縁/スターティングブロックとの接触を解いた場合 (DQ37) ,
- L. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) ,
- M. 競技者が、リレーの自分の区間を完了した後再度水に入った場合 (DQ44)

19. レスキューtowリレー (4×50 m) RESCUE TOW RELAY (4 x 50 m)

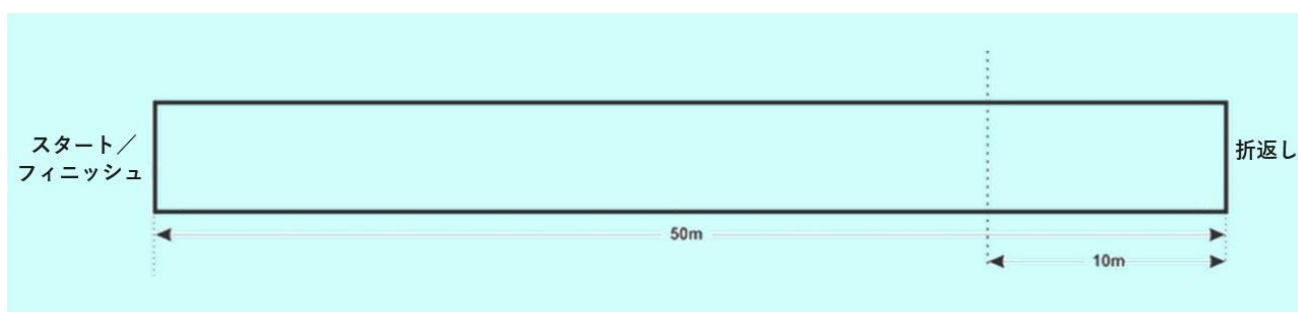


図 13：レスキューtowリレー (4×50 m)

19.1 競技の説明 Event description

4 人の競技者は、それぞれ異なる課題をこなしながら 50 m を順番に泳ぐ。

- A. 第 1 競技者：音による合図で第 1 競技者は飛込みスタートし、フィンをつけずに自由形で 50 m を泳ぐ。第 1 競技者は、ターニング壁/縁にタッチする前に、水面に出ねばならない。

注意：水泳中に「水面上に出る (Break the surface)」とは、競技者の頭が水平面から出ねばならないことを意味する。

- B. 第 2 競技者：フィンを装着した第 2 競技者は、第 1 競技者が壁/縁にタッチした後、飛込みスタートし、自由形で 50 m を泳ぐ。第 2 競技者はターニング壁/縁にタッチする前に浮上する必要はない。

- C. 第 3 競技者：フィンを装着した第 3 競技者は、第 2 競技者が壁/縁にタッチした後、飛込みスタートをし、レスキューチューブをトウ (tow) しながら自由形で 50 m を泳ぐ。(レスキューアとしての役割を担う) 第 3 競技者はターニング壁/縁にタッチする。第 3 競技者はターニング壁/縁にタッチする前に浮上する必要はない。

注意：レスキューチューブ及びそのラインは、チェンジオーバーのために競技者の裁量で配置することができるが(競技者の身体に巻きつけられたライン/紐、水着に挟み込まれたもの等を含む)、競技開始前にレスキューチューブトウ用のライン/ロープを意図的に短くする目的で結ぶ/結び目を作る、又はライン/ロープ自体にクリップ留めした場合、競技者は失格となる。

- D. 第 4 競技者：(ヴィクティムとしての役割を担う) 第 4 競技者は、水中にて少なくとも片方の手をターニング壁/縁又はスターティングブロックに触れた状態で待機する。第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチするより前であっても、第 4 競技者は片方の手でレスキューチューブ、ハーネス、又は紐部分に触れる又は掴む事が許される。第 3 競技者がターニング壁/縁にタッチするまで、第 4 競技者はターニング壁又はスターティングブロックから手を放してはいけない。

注意 1：第 3 競技者は、ターニング壁/縁をタッチするより前に第 4 競技者に意図せず触れてしまったとしても、これをもって失格にはならない。

注意 2：ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを通過するときレスキューチューブがヴィクティムにクリップ装着されていれば、レスキューチューブをヴィクティムの周りにクリップする間、立つ又は歩くことは失格ではない。

- E. 第 3 競技者がプールのターニング壁/縁にタッチし次第、第 3 及び第 4 競技者はターニング壁/縁又はスターティングブロックから手を放し、レスキューチューブの装着を開始してよい。
- F. レスキューアー及び/又はヴィクティムは、レスキューチューブをヴィクティムの両腕の下の胴体に巻き付け、オーリングにフックをかける。
- G. レスキューアー及びヴィクティムは、ターニング壁/縁から離れなければならない。ヴィクティムは、ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを越えるまでに、レスキューチューブが体に巻かれクリップ留めされて確保されていなければならない。
- 注意：レスキューアー及び/又はヴィクティムは、ターニング壁を押しても良い。
- H. ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを通過するとき、ヴィクティムはレスキューチューブでクリップ留めされていなければならない。
- I. 10 m ラインの外側においては、ヴィクティムは背を下にてトウされねばならず、レスキューチューブが巻かれクリップした以外のいかなる方法でもトウされてはならない。
- J. ヴィクティムは水面下におけるスカーリング及びキックにより推進を補助する事が出来るが、バックストローク（背泳ぎ）や水面上でのリカバリー行為を伴う泳法を取ってはならない。
- 注意：ヴィクティムがストリームラインを確保する為、頭部上部に両腕を配置し直す行為は、これをもって失格とはならない。
- K. レスキューアーが、レスキューチューブが巻かれクリップ留めしたヴィクティムを伴い、フィニッシュ壁/縁にタッチする事で競技完了となる。
- L. 状況が許す場合、且つ、オフィシャルの指示の下、リレーの自分の区間を終えた第 1、第 2、及び第 3 競技者は水から上がってよい。競技者らは、他の競技者の邪魔にならぬよう、プールの最も近いサイドへ（レーン）を横断して水から上がるものとする。競技者は、再度水に入ってはならない。

19.2 器材 Equipment

- A. レスキューチューブ及びフィン：「S8 設備及び器材の規格と検査手順」を参照の事。競技者は主催者の準備したレスキューチューブを用いなければならない。
- B. スタート時のレスキューチューブ：第 3 競技者がスタートするにあたり、レスキューチューブ及びその紐について、各自のレーン内であれば、第 3 競技者は自由に配置する事ができる。競技者は、安全且つ適切にレスキューチューブ及び紐を配置することとする。レスキューアーがヴィクティムを確保するまで、レスキューチューブはクリップされていない（unclipped）ままであること³⁴。
- C. レスキューチューブの装着：レスキューチューブは正しく装着されなければならない。競技者の判断で、ランヤード/ハーネスを一方又は両方の肩にかけるか、又は一方の肩から胸にかける。レスキューチューブを正しく装着していたのであれば、（ヴィクティムに向かって）接近する、又は（ヴィクティム）をトウする間に、ランヤード/ハーネスが競技者の腕又は肘に落ちて、又は再びかけ直されても、失格の原因にはならない。

³⁴ 【JLA 注釈】オーリングにクリップがかけられていない状態と解釈する。

- D³⁵. ヴィクティムのトウ：レスキューアーは、体にレスキューチューブが巻かれクリップ留めされたヴィクティムをトウせねばならない。ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを越えるまでに、レスキューチューブはヴィクティムに装着されていなければならない。「ヴィクティムの」頭頂部が 10 m ラインを越えていなければ、ヴィクティムを再度確保するために、レスキューアーは 10 m のチェンジオーバーゾーン内に戻る事が出来る。

注意 1：レスキューチューブを用いたスタートについてーヴィクティムをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短く（例えば、ライン/ロープを輪にして結ぶ/結び目を作る又はクリップで留める）された場合、競技者は失格となる。

注意 2：レース実施中に、レスキューチューブのラインがヴィクティムに巻き付く又は競技者により短くされても、競技者は失格にならないこととする。

- E. 落としたフィンの回収：競技者は、（トウが当該区間で行われる場合、）ヴィクティムのトウに関する競技規則に違反していない限り（「S3-3 マネキン」を参照）、スタート後に落としたフィンを回収して競技を継続する事が出来る。競技者は別のヒートで再度競技を行う事は出来ない。
- F. レスキューチューブの不具合：レース中、レスキューチューブ、紐及び/又はハーネス（ベルト）に技術的な不具合があるとチーフレフリーが判断すれば、チーフレフリーはその競技者を別のヒートで再スタートさせてもよいが、それは、レスキューチューブが主催団体から提供され、全ての競技者は提供されたレスキューチューブを使わねばならない規則になっている場合に限る。

19.3 失格 Disqualification

「S2. 共通競技総則」及び S3-1 から S3-2 にある規則に加えて、以下の行為は失格になる：

- A. 第 1 競技者が、飛込みスタートの後からターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない場合（DQ16），
- B. 前競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、スターティングブロックを離れる又はターニング壁/縁/スターティングブロックとの接触を解除した場合（DQ37），
- C. （水深が浅い事により、競技者の足がプール底面に付いてしまう場合を除き、）ヴィクティムをレスキューチューブ内に確保する際、プールの底を補助として用いた場合（DQ8），
- D. ヴィクティムの頭頂部が 10 m ラインを通過する前で、プールの水深が浅くてヴィクティムにチューブを装着する間競技者が立つことができる場合を除いて、レスキューチューブをヴィクティムに巻き付ける際、プールの付属品（例：レーンロープ、ステップ、水中ホッケーの備品等）を補助として用いた場合（DQ24），
- E. 競技者（レスキューアー）がターニング縁/壁にタッチする前に、同競技者がレスキューチューブのフックを O 型リングにかけた場合（DQ28），
- F. 10 m ラインを通過するまでに（ヴィクティムの頭頂部によって判断される）、レスキュー

³⁵ 【JLA 注釈】英語版ではこの D 項において、「victim（ヴィクティム）」であるべきを「manikin（マネキン）」と誤記された箇所が複数見られる。

- ーチューブがヴィクティムに装着されていない場合 (DQ30) ,
- G. ヴィクティム³⁶をトウせずに押す又はキャリーした場合 (DQ31) ,
- H. ヴィクティムをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープがチームにより意図的に短くされた場合 (DQ32) ,
- I. 10 m ラインを通過した後, レスキューアーがフィニッシュ縁/壁にタッチする前に, ヴィクティムがレスキューチューブから外れてしまった場合 (但し, レスキューチューブの技術的な不具合を除く—「レスキューチューブの不具合」を参照のこと³⁷) (DQ33) ,
- J. ヴィクティムが, 仰向けでなく, レスキューチューブ内にクリップ留めされてなく, レスキューアーより後ろに位置してないで, トウされた場合 (DQ54)³⁸,
- K. ヴィクティムが, 背泳又は水面から腕を出すリカバリーを伴う何らかの泳法で泳いだ場合 (DQ55) ,
- 注意: ヴィクティムが, トウされるのを補助する為に水面下でスカーリングを行う行為, 又はストリームラインを確保する為, 頭部上部に両腕を配置し直す行為は, これをもって失格とはならない,
- L. レスキューアーよりも先に, ヴィクティムがフィニッシュ縁/壁にタッチした場合 (DQ56) ,
- M. レスキューチューブとマネキンが所定の位置にない状態でフィニッシュ壁/縁にタッチした場合 (DQ34) ,
- N. 1 人の競技者が, 2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合 (DQ36) ,
- O. フィニッシュ壁/縁にタッチしなかった場合 (DQ14) ,
- P. 競技者が, リレーの自分の区間を完了した後に再度水に入った場合 (DQ44) 。

a

³⁶ 【JLA 注釈】 この競技ではマネキンを使用しないのに英語版で「manikin (マネキン)」と誤記されている。

³⁷ 【JLA 注釈】 「S3-19.2 器材 F. レスキューチューブの不具合」を参照。

³⁸ 【JLA 脚注】 仰向けでない, クリップ留めされてない, レスキューアーより後ろにいない—これらはどれか 1 つでも生じた場合に失格の対象となるが, 原文は全て「and (及び, 且つ)」で結合されおり, これらが同時に発生しない限り失格の対象ではないという印象を与えている。翻訳はこのままにしておくが, JLA 主催競技会では, これらは[and/or (及び/又は)]で結合されている, 即ち, これらの内 1 つ又は複数が同時に発生した場合に失格の対象であると解釈する。

20. プール競技失格コード表 DISQUALIFICATION CODES FOR POOL EVENTS

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
1. 競技の説明又は共通競技総則に沿って競技しなかった。	全競技種目
2. チーム、競技者及びハンドラーが不正行為をした場合、競技者又はチームは失格となる。不正行為には下記のような例が含まれる： ● ドーピング又は、ドーピングに関連した違反行為、 ● 他の競技者になりすますこと、 ● 競技順や位置決めの投票又は抽選で不正を試みること、 ● 同じ個人種目に 2 度出場すること、 ● 他のチームの競技者として同じ種目に 2 度出場すること、 ● 優位になるため故意にコースを妨害すること、 ● 他の競技者又はハンドラーを押す又は進路を遮って妨害すること、 ● 競技者が外部から身体的又は物質的な助力を受けること（口頭又はその他の指示を除く）、 ● （フェアプレー規範に記載の）競技会の精神に反して参加すること。	全競技種目
3. マーシャリングエリアへの集合に遅れた競技者は、競技をスタートすることができない。これは「did not start」(DNS)又は類義の表現でリザルトシートに記載される。	全競技種目
4. 競技のスタートに不在だった競技者又はチームは、A 又は B 決勝を除いて、失格となる。これは「did not start」(DNS)又は類義の表現でリザルトシートに記載される。	全競技種目
5. 会場施設、宿泊施設又は他者の所有物を故意に破壊する行為は、個人としての失格、又は競技会全体での失格となる。	全競技種目
6. 競技会全体での失格となるオフィシャルへの侮辱。	全競技種目
7. 粘着性又は接着性物質（液体、個体又は煙霧質）を手又は足、又はマネキン又はレスキューチューブに用いて掴みやすくしたり、プールの底をけりやすくした場合。	全競技種目
8. 特に認められた場合（即ち、障害物スイム及びリレー、4×25 m マネキンリレー、マネキントウ、スーパーライフセーバー、マネキンライフセーバーメドレー、メドレーリレー、レスキュートウリレー）を除き、プールの底を補助に用いた場合。	全競技種目

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
9. レース終了後、オフィシャルの許可がある前に、水から出た場合。	全競技種目
10. 競技者がスタートの合図の前に、前方へのスタート動作を開始した場合。	全競技種目
11. 障害物の上を通過し、ただちに障害物の上又は下を戻り、その後下を潜り直さなかった場合。	障害物スイム 障害物リレー
12. 飛び込んだ後又はターンの後、障害物の下を通過する前及び後に浮上しなかった場合。	障害物スイム 障害物リレー
13. ターンの際、壁/縁にタッチをしなかった場合。	障害物スイム
14. フィニッシュの壁/縁にタッチしなかった場合。	全競技種目
15. マネキンに向かって潜る前に水面に浮上しなかった場合。	マネキンキャリー マネキンライフセーバーメドレー
16. 競技者が、飛込みスタートの後から 50 m ターニング壁/縁にタッチする前までに浮上しない場合。 注意：リレー競技では、この失格は第 1 競技者にのみ適用される。	レスキューメドレー スーパーライフセーバー メドレーリレー プールライフセーバーリレー レスキュートウリレー
17. マネキンと共に水面に浮上する際、（当該競技で活用可能な）プールの付属品（例えば、レーンロープ、ステップ、排水管、水中ホッケーの備品）を補助として用いた場合—ただし、（競技規則で）規定されている場合—に限り、プールの底は含まない。	マネキンキャリー レスキューメドレー マネキンキャリー・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー マネキンリレー 障害物スイム ⁴⁰ 障害物リレー プールライフセーバーリレー レスキュートウリレー
18. （フィンを装着しないでキャリーする場合）マネキンの頭頂部が 5 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションで確保していなかった場合。	マネキンキャリー マネキンリレー レスキューメドレー スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー プールライフセーバーリレー

⁴⁰ 【JLA 注釈】原文では削除されているが、「障害物スイム」の失格 (S3-8.3 B) に DQ17 があることから挿入している。

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
19. (S3-3 に記述の通り) 正しくないマネキンをキャリーする方法を用いた場合。	マネキンキャリー マネキンキャリー・ウィズフィン レスキューメドレー スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー マネキンリレー プールライフセーバーリレー
20. マネキンの顔を水面より下にしてトウした場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
21. フィニッシュの壁/縁又はターニング壁/縁にタッチする前に、マネキンを放した場合。	マネキンキャリー マネキンキャリー・ウィズフィン レスキューメドレー スーパーライフセーバー マネキンリレー マネキンライフセーバーメドレー
22. ターンの後、マネキンを引き上げる前に浮上した場合。	レスキューメドレー
23. (フィンを装着してキャリーする場合) マネキンの頭頂部が 10 m ラインを越えるまでに、マネキンを正しいキャリーポジションで確保していなかった場合。	マネキンキャリー・ウィズフィン プールライフセーバーリレー
24. プールの水深が浅くてマネキン (又はヴィクティム) にチューブを装着する間競技者が立つことができる場合を除いて、レスキューチューブをマネキン (又はレスキュートウリレーではヴィクティム) に巻きつける際、プールの付属品 (例えば、レーンロープ、ステップ、水中ホッケーの備品) を補助として用いた場合 (即ち、マネキントウ、スーパーライフセーバー、マネキンライフセーバーメドレー、レスキュートウリレー)。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー レスキュートウリレー ⁴²
25. 50 m/150 m 地点で、競技者がマネキンに故意に触れる前にプール壁/縁にタッチしなかった場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
26. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前にマネキンハンドラーがマネキンを放した場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー

⁴² 【JLA 注釈】原文では「all events (全競技種目)」だが、競技別規則の失格の項において DQ24 を採用している競技種目のみ列挙した。

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
27. マネキンハンドラーが競技中故意に水に入った場合、水に入り他の競技者の動作を妨害した場合、又は競技の判定に干渉した場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
28. 競技者がターニング壁/縁にタッチする前に、レスキューチューブのクリップをリングにかけた場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー レスキュートウリレー
29. レスキューチューブをマネキンの周りに正しく巻いて確保しなかった場合（即ち、マネキンの胴体及び両腕の下又は両腕に接触して巻いていない、及びクリップをオーリングにかけていない）。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
30. 10 m チェンジオーバーゾーン内（マネキンの頭頂部で判定する）で、マネキン/ヴィクティムに正しくレスキューチューブを巻かなかった場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
31. マネキンをトウする代わりに押したり、キャリーした場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー レスキュートウリレー
32. マネキン/ヴィクティムをトウするためレース開始前にレスキューチューブのライン/ロープが競技者により意図的に短くされた場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー メドレーリレー レスキュートウリレー
33. 10 m ラインを通過した後、レスキューアーがフィニッシュ縁/壁にタッチする前に、マネキン/ヴィクティムがレスキューチューブから外れてしまった場合（但し、レスキューチューブの技術的な不具合を除く―「レスキューチューブの不具合」を参照のこと）。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
34. レスキューチューブとマネキン/ヴィクティムが所定の位置にない状態でフィニッシュ壁/縁をタッチした場合。	マネキントウ・ウィズフィン スーパーライフセーバー マネキンライフセーバーメドレー
35. マネキンを運んでいる競技者と次にマネキンを受け取る競技者以外の競技者が、チェンジオーバーのために助力を与えた場合。	マネキンリレー プールライフセーバーリレー
36. 1 人の競技者が、2 つ又はそれ以上の区間に出場した場合。	障害物リレー マネキンリレー メドレーリレー

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
	プールライフセーバーリレー レスキュートウリレー
37. 前の競技者が壁/縁にタッチする前に、(次の競技者が) スタートイングブロックを離れた場合、又は、ターニング壁/縁/スタートイングブロックとの接触を解除した場合。 注意：プールライフセーバーリレーの第 2 競技者は、マネキンと共に浮上する前又は後でターニング壁/縁にタッチすることは求められていない。	障害物リレー マネキンリレー メドレーリレー プールライフセーバーリレー レスキュートウリレー
38. 指定されたチェンジオーバーゾーンの手前又はそれを越えた場所でマネキンが受け渡された場合。	マネキンリレー
39. 次の競技者がマネキンを掴む前に、競技者がマネキンを放した場合(即ち、各競技者の一方の手及び/又は腕がマネキンに触れていなければならない)。	マネキンリレー プールライフセーバーリレー
40. 競技者がレスキューチューブのクリップをリングにかけた場合。	メドレーリレー
41. ヴィクティムがレスキューチューブの紐を掴んでいる場合。	メドレーリレー
42. ヴィクティムが腕を動かして協力したり、又はレスキューチューブ及び/又はクリップを両手で掴んでいない場合。	メドレーリレー
43. 10 m ラインを越えた後に、ヴィクティムがレスキューチューブ(又はクリップ)を保持していない又は放してしまった場合。	メドレーリレー
44. 競技者が、リレーの自分の区間を完了した後に再度水に入った場合。	障害物リレー マネキンリレー メドレーリレー プールライフセーバーリレー レスキュートウリレー
45. ヴィクティムが、フィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せてもらうラインを、身体のいずれかの部分を使って回収又は掴む時に、手でクロスバーを掴み続けていなかった場合。	ラインスロー
46. ライン/ロープスロアーが、スタート合図から自チームのヴィクティムがフィニッシュ壁/縁にタッチするまでに、指定されたスローゾーンを出た場合。	ラインスロー
47. ライン/ロープスロアーが、ヴィクティムをプールのフィニッシュ壁/縁まで戻すため、腕を使って手繰り寄せず、ライン/ロープを手で掴んで又は身体のいずれかの部分に巻き付けて歩いた又は走った、又は後方 2 m ラインマークを超えた場所で手繰り寄せた場合。	ラインスロー

コード及び失格内容 Code and Disqualification	競技種目 Events
48. ヴィクティムが自分のレーンの外にあるスローラインを掴んだ場合。	ラインスロー
49. ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せられている間、前を向いていなかった場合。	ラインスロー
50. ヴィクティムがフィニッシュ壁/縁まで手繰り寄せられている間、両手でスローライン/ロープを掴んでいない場合（壁/縁にタッチするために一方の手をスローラインから放すことは認められる）。	ラインスロー
51. ヴィクティムがスローラインを「登るように」手繰り寄せた場合。	ラインスロー
52. ライン/ロープスロアーがラインを投げる練習をした場合。	ラインスロー
53. 第 3 競技者が、チェンジオーバーの間、マネキンの頭部が水面から出る前に、ターニング壁/縁との接触を解いた場合。	プールライフセーバーリレー
54. ヴィクティムが、仰向けでなく、レスキューチューブ内にクリップ留めされてなく、レスキューアーより後ろに位置していないで、トウされた場合。	レスキュートウリレー
55. ヴィクティムが背泳又は水面から腕を出すリカバリーを伴う何らかの泳法で泳いだ場合。 注意：ヴィクティムがトウされることを助けるため水中でスカーリングすること、及び、ヴィクティムがストリームラインを確保する為、頭部上部に両腕を配置し直すことは失格ではない。	レスキュートウリレー
56. ヴィクティムがレスキューアーより前にフィニッシュ縁/壁にタッチした場合。	レスキュートウリレー

注意：ラインスロー競技において、45 秒の音による競技終了合図までにヴィクティムをフィニッシュ壁/縁まで引っ張って来れなかった場合は、失格（DQ）ではなく、DNF（Did Not Finish = 終了しなかった）となる。

参考文献 References

- [1] 日本ライフセービング協会（編），サーフライフセービング教本（大修館書店，2024）．
- [2] 日本ライフセービング協会（編），プール・ライフガーディング教本（大修館書店，2017）．
- [3] World Aquatics, Competition Regulations (version 1st July 2024)
<https://www.worldaquatics.com/rules/competition-regulations>（2024 年 7 月 21 日リンク確認）．
- [4] 日本水泳連盟 競技委員会，競泳競技規則 競技役員（競泳）の手引き 第 19 版（2014）．
- [5] 日本水泳連盟，プール公認規則 2023（2023.4.1 施行）．
- [6] 日本水泳連盟，プール公認規則 2024（2024.4.1 施行）．
- [7] 日本水泳連盟，プール公認規則 2025（2025.4.1 施行）．
- [8] Jelle MEINTSMA, Lifesaving World Championships 2024 - Gold Coast, Technical Officials Newsletter No. 2 (LWC2024 テクニカルオフィシャル予定者向けニュースレター)，2023 年 7 月 22 日．
- [9] 日本ライフセービング協会，ILS 競技規則 2023 年版の補足説明について，第 2024-S006 号，2024 年 7 月 4 日
ILS Sport Commision Technical Bulletin #5, July 1st, 2024,
<https://www.ilsf.org/wp-content/uploads/2024/07/ILS-Competition-Rule-Book-2023-Technical-Bulletin-5-Final-2-July-2024-V2.pdf>（2024 年 7 月 21 日リンク確認）．
- [10] 日本ライフセービング協会，メドレーリレーの第 3 競技者から第 4 競技者への引継ぎに関するルールの捉え方について，第 2023-S004 号，2024 年 2 月 15 日．
- [11] 日本ライフセービング協会，メドレーリレーの第 3 競技者のレスキューチューブ取り扱いに関する注意喚起，第 2024-S004 号，2024 年 5 月 3 日．

JLA 競技規則 編著者・協力者の履歴

1993 年・初版～1995 年・第 2 版

文珠寺裕之（委員長），小峯力，永井宏，戸田正雄，山口毅，山崎博志，江沢陽子

1997 年・第 3 版

永井宏（委員長），小峯力，山口毅，山崎博志，疋田美貴，江沢陽子，柴田奈美，大西明，中山昭

2004 年版・初版

深山元良（委員長），安藤烈，飯塚哲也，泉田昌美，遠藤大哉，塚本隆之，中村勝，川地政夫，
中山昭

〈翻訳協力〉重元典子（旧姓：坂本），根岸賢輔

2006 年版・初版

深山元良（委員長），安藤烈，飯塚哲也，池谷薫，泉田昌美，遠藤大哉，木野康信，塚本隆之，
中村勝，渡辺智美，川地政夫，中山昭，荒木雅信

2008 年版・初版

深山元良（委員長），安藤烈，飯塚哲也，池谷薫，泉田昌美，木野康信，塚本隆之，中村勝，
渡辺智美，川地政夫，中山昭，三浦慶子，藤然智，荒木雅信

2010 年版・初版

深山元良（委員長），飯塚哲也，池谷薫，泉田昌美，橘川克巳，木野康信，塚本隆之，中村勝，
吉田健博，渡辺智美，川地政夫，中山昭，三浦慶子，稲垣裕美

2012 年版・初版

塚本隆之（委員長），飯塚哲也，橘川克巳，泉田昌美，渡辺智美，池谷薫，中島重之，藤田善照，
林昌広，深山元良，川地政夫

2014 年版・初版

塚本隆之（委員長），橘川克巳，池谷薫，泉田昌美，梶本道彦，中島重之，中島典子，林昌広，
藤田善照，渡邊彩子，相澤千春，堤容子，西嶋智美，宮部周作

2016 年版・初版

中島典子（委員長），梶本道彦，栗栖清浩，中島重之，藤田善照，水川雅司，毛利智，塚本隆之，
池谷薫，泉田昌美，林昌広，宮部周作（ILS スポーツ委員），国際室

2018 年版 (2018.07.13 版，2018.07.20 版)

編著：中島典子，中島重之，藤田善照，梶本道彦，栗栖清浩，水川雅司，栗生賢一，松永祐，毛利智
協力：宮部周作（ILS スポーツ委員），西嶋智美（国際室），西山俊（アスリート委員会）

2019 年版 (2019.04.01 版)

編著：中島典子，中島重之，藤田善照，梶本道彦，栗栖清浩，水川雅司，栗生賢一，松永祐，
毛利智，濱田博孝，南部孝二（競技運営・審判委員会），
桂里帆，齊藤愛子，細井梨沙（国際室），泉田優花，大山玲奈

協力：宮部周作（ILS スポーツ委員），西山俊（アスリート委員会），錦織功延（アンチ・ドーピング委員会）

2020 年版 第 1～3, 8 章 (2020.03.16 暫定版)

編著：中島典子，中島重之，藤田善照，梶本道彦，栗栖清浩，水川雅司，栗生賢一，松永祐，
毛利智，濱田博孝，南部孝二（競技運営・審判委員会）

2020 年版 (2020.06.01 版, 2020.06.04 版)

編著：中島典子，中島重之，藤田善照，梶本道彦，栗栖清浩，水川雅司，栗生賢一，松永祐，毛利智，濱田博孝，南部孝二（競技運営・審判委員会），鈴木慎一，新部愛海（国際室）
協力：西山俊，特定非営利活動法人神奈川県ライフセービング協会（競技規則 B.2.2）

2021 年版 (2021.03.04 版)

編著：
栗栖清浩（競技運営・審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee）
中島典子，栗生賢一，梶本道彦，中島重之，南部孝二，濱田博孝，藤田善照，松永祐，水川雅司，毛利智（競技運営・審判委員会）
鈴木慎一（国際室）
宮部周作（スポーツ本部長/ILS Sports Commission & Multi-Sport Games Committee Chair）
協力：
中川容子（国際室/ILS Drowning Prevention and Public Education Commission）
西山俊（アスリート委員会）
松井宏泰（スポーツ育成委員会）
飯塚剛志，井藤秀晃（IRB 競技分科会）

2021 年版 (2021.08.30 版)

編著：
栗栖清浩（競技審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee）
中島典子，栗生賢一，梶本道彦，中島重之，南部孝二，濱田博孝，藤田善照，毛利智（競技審判委員会）
水川雅司（JLA 事務局/ライフセービングスポーツ副本部長）
協力：
高野絵美（広報室）

2021 年版 (2021.11.26 版)

編著：
栗栖清浩（競技審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee）
中島典子，栗生賢一，梶本道彦，中島重之，南部孝二，濱田博孝，藤田善照，毛利智（競技審判委員会）
水川雅司（JLA 事務局/ライフセービングスポーツ副本部長）

2022 年版 (2022.07.01 版)

編著：
栗栖清浩（競技審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee）
中島典子，栗生賢一，梶本道彦，中島重之，南部孝二，濱田博孝，藤田善照，毛利智，日馬孝昌（競技審判委員会）
田中えりか（IRB レスキュー委員会/SERC 分科会）
水川雅司（JLA 事務局/ライフセービングスポーツ副本部長）
協力：
鈴木慎一（IRB 競技分科会/国際室）

松井宏泰 (スポーツ育成委員会)

飯塚剛志, 井藤秀晃 (IRB 競技分科会)

宮部周作 (スポーツ本部長/ILS Sports Commission & Multi-Sport Games Committee Chair)

2023 年版 (2023.08.07 版 : 2023 年 07 月 07 日公開版, 及び同年 08 月 07 日修正公開版)

編著 :

栗栖清浩 (競技審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee)

中島典子, 梶本道彦, 南部孝二, 藤田善照, 毛利智, 日馬孝昌 (競技審判委員会)

水川雅司 (JLA 事務局/ライフセービングスポーツ副本部長)

鈴木慎一 (IRB 競技分科会/国際室)

田中えりか (SERC 分科会/IRB レスキュー委員会)

古井悠太 (国際室)

協力 :

西山俊 (アスリート委員会)

松井宏泰 (スポーツ育成委員会)

飯塚剛志, 井藤秀晃 (IRB 競技分科会)

坂本陸 (ハイパフォーマンsteamコーチ)

2024 年版 (2024.08.01 版 : 2024 年 07 月 25 日公開版)

編著 :

栗栖清浩 (競技審判委員会/ILS Lifesaving Sport Regulations Committee)

中島典子, 梶本道彦, 南部孝二, 藤田善照, 毛利智, 日馬孝昌, 宮川悠斗 (競技審判委員会)

水川雅司 (JLA 事務局/ライフセービングスポーツ副本部長)

鈴木慎一 (IRB 競技分科会/国際室)

田中えりか (SERC 分科会/IRB レスキュー委員会)

協力 :

米林ひろこ (株式会社 LPH)

奈良部真弓 (SERC 分科会)

西山俊 (アスリート委員会)

楠本慶明 (アクアティック イベント セーフティ コーディネーター分科会 (ASC))

坂本陸 (ハイパフォーマンsteamコーチ)

飯塚剛志, 井藤秀晃 (IRB 競技分科会)

伊藤隆寛 (特定非営利活動法人九十九里ライフセービングクラブ)

上野義洋 (競技安全委員会)

天川仁 (特定非営利活動法人西浜サーフライフセービングクラブ)

田村憲章 (ライフセービングスポーツ本部長)

2025 年版 まえがき, 第 1~2 章, 第 4 章, 第 7~8 章, 付録

(2025.09.01 版 : 2025 年 08 月 01 日公開版)

第 3 章

(2025.12.20 版 : 2025 年 12 月 01 日公開版)

編著 :

栗栖清浩 (競技審判委員会/ILS Sports Commission, Rules & Technical Projects Working Group)

毛利智，梶本道彦，日馬孝昌，橋本和樹，南部孝二，藤田善照，宮川悠斗，脇田彰吾

(競技審判委員会)

鈴木慎一 (IRB 競技分科会)

中島典子 (ライフセービングスポーツ本部 副本部長)

水川雅司 (JLA 事務局)

協力：

西山俊 (アスリート委員会)

楠本慶明 (アクアティック イベント セーフティ コーディネーター分科会 (ASC))

坂本陸 (ハイパフォーマンスチームコーチ)

飯塚剛志，井藤秀晃，芹澤祐介 (IRB 競技分科会)

伊藤隆寛 (特定非営利活動法人九十九里ライフセービングクラブ)

2025 年版 (2026 年 07 月改訂) 2026.08.01 発効：2026 年 07 月 15 日公開)

編著：

栗栖清浩 (競技審判委員会/ILS Sports Commission, Rules & Technical Projects Working Group)

毛利智，梶本道彦，日馬孝昌，橋本和樹，南部孝二，藤田善照，宮川悠斗，脇田彰吾

(競技審判委員会)

中島典子 (ライフセービングスポーツ本部 副本部長)

JLA コンペティション・ルールブック

1993 年 5 月 20 日	初版発行
1995 年 3 月 20 日	第 2 版発行
1997 年 9 月 1 日	第 3 版発行
2004 年 4 月 10 日	2004 年版 初版発行
2007 年 4 月 25 日	2006 年版 初版発行
2008 年 4 月 23 日	2008 年版 初版発行
2010 年 4 月 12 日	2010 年版 初版発行
2012 年 9 月 1 日	2012 年版 初版発行
2014 年 5 月 27 日	2014 年版 初版発行
2017 年 4 月 1 日	2016 年版 初版発行
2018 年 7 月 13 日	2018 年版 (2018.07.13 版) 発行
2018 年 7 月 20 日	2018 年版 (2018.07.20 版) 発行
2019 年 4 月 1 日	2019 年版 (2019.04.01 版) 発行
2020 年 3 月 16 日	2020 年版 暫定版 第 1～3, 8 章 (2020.03.16 版) 発行
2020 年 6 月 1 日	2020 年版 (2020.06.01 版) 発行
2020 年 6 月 4 日	2020 年版 (2020.06.04 版) 発行
2021 年 3 月 4 日	2021 年版 (2021.03.04 版) 発行
2021 年 8 月 30 日	2021 年版 (2021.08.30 版) 発行
2021 年 11 月 26 日	2021 年版 (2021.11.26 版) 発行
2022 年 7 月 1 日	2022 年版 (2022.07.01 版) 発行
2023 年 7 月 7 日	2023 年版 (2023.08.07 版) 公開 (8 月 7 日施行)
2023 年 8 月 7 日	2023 年版 (2023.08.07 版) 公開 (8 月 7 日施行)
2024 年 7 月 25 日	2024 年版 (2024.08.01 版) 公開 (8 月 1 日施行)
2025 年 8 月 1 日	2025 年版 まえがき, 第 1～2 章, 第 4 章, 第 7～8 章, 付録 (2025.09.01 版) 公開 (9 月 1 日施行)
2025 年 12 月 1 日	2025 年版 第 3 章 (2025.12.20 版) 公開 (12 月 20 日施行)
2026 年 07 月 1 日	2025 年版 (2026 年 7 月改訂版) (2026.08.01 版) 公開

◆編 集 公益財団法人 日本ライフセービング協会 競技規則 2025 年版 編著者一同

◆発 行 公益財団法人 日本ライフセービング協会

〒105-0022 東京都港区海岸 2-1-16 鈴与浜松町ビル 7F

TEL : (03) 6381 7597 / FAX : (03) 6381 7598

Web site : <https://ls.jla-lifesaving.or.jp/>

(無断転載を禁ず)

